西之表市文化財調査報告書 5

県営畑地帯総合土地改良事業安納・住吉地区
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

安納調査区
俣江遺跡

住吉調査区
高峯遺跡

1985年 3月
鹿児島県西之表市教育委員会

安納地区航空写真

住吉地区航空写真

序　　文

安納・住吉地区の遺跡は，昭和59年度県営ほ場整備事業予定地内に所在した関係上，工事着手前に埋蔵文化財の確認調査を実施して，文化財の保護と開発工事との調和を図る目的で，県教育委員会にその発掘技術を依頼し，西之表市が行った事業であります。

事業費総額 300万円，うち国庫補助 150万円，県費補助75万円，市費75万円で，昭和59年９月３日より，およそ１ヶ月間実施いたしました。種子島の基幹作物は，甘蔗・甘藷ですが，発掘対象地の大部分も甘蔗・甘藷でした。残暑のきびしい最中に，おもに安納・住吉地域の主婦の方々を作業員として進めましたが，予定どおり無業終了することができました。

発掘調査を直接指導された県文化課職員の皆さんや発掘作業員として従事された方々又，大切な農地を，この発掘のために快よく提供くださった方々に対し，厚くお礼申し上げます。

黒潮洗う種子島は，古来より，中国や南島との交流史の中で重要な役割を果してきたことは数多くの記録が証明しているところですが，それ故に，貴重な歴史的遺物も，このような発掘という方法で日々に新しく発見され，歴史が塗り変えられていくわけであります。

今後とも，文化財保護・保存に，より一層の御理解を賜りますよう，お願い申しあげます。

昭和60年３月

西之表市教育委員会教育長　　鳥　居　士　郎

例　　言

1. 本報告書は，西之表市教育委員会が，文化庁及び鹿児島県の補助を得て，昭和59年度に実施した安納・住吉地区に所在する遺跡の確認調査報告である。なお，遺跡名は，包含層の確認された地点の小字名を付して遺跡名とした。

   安納地区 ― 俣江遺跡

   住吉地区 ― 高峯遺跡

2. 調査の組織は調査の経過の中で記した。
3. 本書で用いたレベル数値は，海抜高である。
4. 本書の執筆は次の通りであり，編集は吉永が行った。なお付編として「種子島の地勢」を収録した。

第 1 章	鮫島安豊
第 2 章	関　一之
第3～6章	吉永正史
付　編	鮫島安豊

5. 本書の遺物番号は，通し番号とし，挿図番号と図版番号とは一致する。
6. 出土遺物は，本報告書刊行後西之表市教育委員会が保管し，一部は西之表市立種子島開発総合センターに展示・公開する。

目　　次

序　　文
例　　言
第１章　調査の経過 …… 11
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 11
　第２節　調査の組織 …… 11
　第３節　調査の経過 …… 12
第２章　遺跡の位置及び環境 …… 13
第３章　層　　位 …… 17
第４章　安納地区の調査 …… 21
　第１節　調査の概要 …… 21
　第２節　遺　　構 …… 21
　第３節　遺　　物 …… 22
　　土　　器
　　石　　器
　第４節　小　　結 …… 23
第５章　住吉地区の調査 …… 27
　第１節　調査の概要 …… 27
　第２節　遺　　物 …… 27
　　出土遺物 …… 27
　　採集遺物 …… 32
　第３節　小　　結 …… 37
第６章　まとめにかえて …… 38
付　編　種子島の地質 …… 39

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 16
第２表　安納地区出土及び採集の石器計測表 …… 22
第３表　住吉地区出土の石器計測表 …… 31
第４表　住吉地区の採集の石器計測表 …… 33
　　種子島の地質層序 …… 40
　　地史年表 …… 42

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置及び周辺の遺跡……15
第2図　土　層　図……17
第3図　安納地区地形図及びトレンチ配置図……19
第4図　溝状遺構実測図……21
第5図　安納地区出土の遺物－土器……22
第6図　安納地区出土の遺物－石器及び採集資料……23
第7図　住吉地区地形図及びトレンチ配置図……25
第8図　住吉地区出土の遺物－土器……28
第9図　住吉地区出土の遺物－石器1……30
第10図　住吉地区出土の遺物－〃　2……31
第11図　住吉地区採集資料－土器……32
第12図　住吉地区採集資料－石器1……34
第13図　住吉地区採集資料－石器2……35
第14図　住吉地区採集資料－石器3……36
第15図　住吉地区採集資料－石器4……37
第16図　種子島の地形……39
第17図　種子島における地質現象……41
第18図　種子島の地質図……43
第19図　北部の地質……44
第20図　中部の地質……45
第21図　南部の地質……46

図　版　目　次

グラビア(1)　安納地区航空写真
グラビア(2)　住吉地区航空写真

第1図　(上)　安納軍場地区遠景
第2図　(上)　土層（第5トレンチ）
第3図　(上)　住吉地区近景
第4図　(上)　遺物出土状況（第　トレンチ）
第5図　住吉地区出土遺物……55
第6図　住吉地区出土遺物……57
第7図　(上)　住吉地区出土遺物
第8図　住吉地区の採集遺物……61
第9図　住吉地区の採集遺物……63
第10図　(上)　住吉地区の採集遺物
第11図　敲石の敲打痕……67
(下)　安納地区発掘風景……47
(下)　遺物出土状況（第3トレンチ）……49
(下)　土層（第1トレンチ）……51
(下)　安納地区出土遺物……53
(下)　住吉地区の採集遺物……59
(下)　敲石の敲打痕……65

第1章　調　査　の　経　過

第1節　調査に至るまでの経過

種子島は，海岸段丘が極めて発達している地域であるが，とくに，このたびの発掘の対象となった　安納，住吉地区に於ては，顕著にそれが認められる。ところで本市では，昭和４７年以来畑地帯の総合整備事業として，県営ほ場整備事業が進められてきたが，これらの海岸段丘上は，古代からの生活の舞台であり，これまでにも，数多くの遺跡が確認されている。

この安納（　俣江　遺跡）住吉（高峯遺跡）については，昭和５８年５月鹿児島県熊毛支庁土地改良課の要請により，県教育庁文化課，青崎和憲氏，山口俊博氏が分布調査のため来市，約100町歩について調査を行った。

種子島の主幹作物は，甘蔗，甘藷であるから，これらの作物のほぼ植え付け時点に合わせて行なったものである。尚，本市の埋蔵文化財の事務は，これらの分布調査の時点では，市教委社会教育課で行なったが，その後，行財政改革が進められ，昭和５８年１０月より，文化関係は，市民会館の業務の中へ，文化財関係は，種子島開発総合センターの業務の中へ，それぞれ，移管され事務の改善が行なわれた。

それ故に，分布調査は，市教委社会教育課，文化係長樋口兼一氏が担当し，確認調査以降は，種子島開発総合センターでそれぞれ，実施したものである。

第2節　調 査 の 組 織

調査主体者	西　之　表　市		
調査責任者	西之表市教育委員会教育長		鳥　居　士　郎
事務担当	西之表市種子島開発総合センター	館長	河　東　　暸
		主任	鮫　島　安　豊
		主事	田　上　利　男
		事務補助	皆　越　真喜子
調査担当	鹿児島県教育委員会文化課文化財研究員		吉　永　正　史
	〃	主事	青　崎　和　憲
	〃	〃	牛ノ浜　　修
	〃	調査補助	関　　一　之

なお，調査企画において，県教育委員会文化課長桑原一廣，同課長補佐坂口肇，同主幹中村文夫，同主任文化財研究員諏訪昭千代（昭和５９年９月まで），同主任文化財研究員向山勝貞（昭和５９年９月から）の各氏の他，同管理系の指導・助言を得た。又，出土遺物については，県考古学会会長の河口貞徳氏に指導を受けた。

第3節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄により略述する。

9月3日　安納地区の確認調査を開始する。第1トレンチ（2×5m），第2トレンチ（2×3m）を設定し，掘り下げる。

9月4日　第3トレンチ（2×10m），第4トレンチ（2×10m）を設定する。
第1・2・3トレンチの掘り下げを行う。第1・2トレンチでの遺物の出土はない。

9月5日　第3・4トレンチの掘り下げ。第5トレンチ（2×3m）の設定。
第3トレンチから土器片とすり石が出土する。第1トレンチ土層実測。

9月6日　第3～5トレンチの掘り下げ。第5トレンチでは条痕文土器片の散布がみられる。
第2・3トレンチ土層実測，平板実測。第1・2トレンチ埋め戻し。

9月7日　第4トレンチの溝状遺構を拡張して検出するも性格不明。第3～6トレンチの土層実測，平板実測後埋め戻し。

9月10日　住吉地区の調査を開始する。第1地点（字高峯）に第1トレンチ（2×5m），第2トレンチ（2×5m）を設定し掘り下げる。

9月11日　第1・2トレンチから塞ノ神式土器片出土する。

9月12日　第3地点に第3トレンチ（2×5m）を設定し掘り下げる。第2地点に第4トレンチ（2×5m）を設定する。

9月13日　第2～4トレンチ掘り下げ。平板実測，土層図作成。第5トレンチ（2×3m）を設定し掘り下げるが，表土下はシラス層である。

9月14日　雨のため現場作業中止。

9月17日　第3・4トレンチ平板実測。第6トレンチ（2×5m）を設定し，掘り下げ。
市教育長以下3名視察。

9月18日　雨のため作業中止。晴れ間に第6トレンチ土層実測。

9月19日　第7～9トレンチ（2×5m）を設定し，掘り下げ。

9月20日　第8・9トレンチは包含層みられず。第7・10トレンチ掘り下げ。

9月21日　第7・10トレンチ土層実測後他のトレンチも含めて埋め戻し。

9月25日　第8地点（字横尾）に第11・12トレンチ（2×5m）を設定し掘り下げるも包含層なし。第7地点に第13トレンチ（2×3m）を設定し掘り下げるも遺物の出土なし。

9月26日　第11・12トレンチ土層実測後埋め戻し。遺物の散布がみられる新しい地点に第15・16トレンチ（2×5m）を設定し掘り下げる。

9月27日　第14トレンチ（2×3m）を設定し掘り下げるも包含層なし。
第16トレンチより少量の土器片出土。周囲からは多量の石器が採集される。

10月4日～6日　第14～16トレンチの土層実測，平板実測後埋め戻し。

10月　以降　整理作業及び原稿執筆

第２章　遺跡の位置及び環境

種子島は大隅半島佐多岬の東南約４０キロメートルの海上にあり，南北の長さ５２キロメートル，幅１２キロメートル，最地狭部で約６キロメートルにしかすぎない細長い島であり，屋久島・口永良部島・黒島・竹島・馬毛島などと共に熊毛諸島を形成し，海岸線の長さはその中では最大，面積では屋久島に次ぐものである。

種子島は最高標高２８２.３メートルの低平な島であり，全島にわたり台地上や浜提上に砂丘が発達しており，地域により分布・発達の状態は異なるが７～８段の段丘面の発達が認められる。また地殻変動の形成として，島を斜めに截断する北西～南東方向の断層運動と島の長軸方向に主として認められる褶曲運動があり，このため島の東海岸と西海岸では多少景観も異なり，黒潮本流の洗う東海岸では巨岸が露出し断崖に富んでおり，西海岸では砂丘・海岸段丘の発達が認められる。また島の北部と南部を比較すると，北半部では降起波蝕台起源と考えられる丘陵状の小起伏が中央部を南北に走り島の山陵を形成し，南半部ではおおよそ，台地状をなして広く海岸段丘が発達している。

このように東・西・南・北一様に異なる地形も加え，島内各地には独特の民俗・風習・伝説・伝承・民間信仰・俗信等が豊富に残され，遺跡も南種子町・広田遺跡に代表されるような，南北文化の交流地点として位置付けられるような貴重な遺跡も数多い。

各時期を代表する遺跡を全島の中で概観してみると，吉田式系土器を出土する現和・下剥峯遺跡，轟式土器の出土する古田・二本松遺跡，塞ノ神式土器を出土する中種子町輪之尾遺跡，曽畑式土器の本城遺跡，中種子町千草原遺跡など，更には島内各地で発見される市来式土器，指宿式土器を出土する大花里貝塚，西平式土器との関連する納曽式土器を出土する納曽遺跡など，縄文時代でさえ無数の貴重な遺跡が発見されており，弥生時代に至っては，南種子町，広田遺跡・同島ノ峯遺跡・西之表，上能野貝塚等，全国的に注目を浴びる遺跡も発見されている。

安納地区は，種子島の東海岸に面しており，西之表市街地より約５～６キロメートル離れたなだらかな開折台地上に位置する。この台地は南側に安納川が流れ，これにより沖積平野が形成され，島北部としては中規模な水田地帯として拓けている。またこの水田地帯の南側には，現和地区庄司浦部落となっている。この地区は海岸段丘が大きく海岸線近くまで大きくせりだしており，その崖下の県道沿に集落を形成している。またこの段丘上には，下剥峯・大四郎・内和・赤木・指辺等の遺跡が立地している。また庄司浦部落は安納地区の花木浦と共に漁業の盛んな地域でもある。

安納地区の集落は，安納川北岸沿と軍場地区に二割することができ，古くは花木浦を漁港として漁業も行なわれたが，現在は海岸線までのゆるやかな傾斜を利用し，さとうきび・さつまいも・えんどう等の畑作が中心に営まれており，国立農業試験場もあり農業中心の集落である。

今回調査の行なわれた軍場地区は，安納地区の北部を占め，種子島では二番目に高い天女神楽（２３７．９メートル）を見あげるように，集落はその山裾に発達している。安納小よりには，島内では珍しく沖積段丘が認められるが，集落から海岸線までのゆるやかな傾斜の台地が，今回の圃場整備工事の対象となる農地であり，この地区の南側はすでに工事完了している。この工事完了区内より弥生時代と思われる数点の土器片・磨石等が発見されており，また安納峯郷地区は多量の靴形有肩の打製石斧が採集された地点として，以前より注目をされていた地区でもあったので，それに関連する遺構・遺物等の確認が期待された。

西之表市街地を北端とする国道５８号線を海岸線を沿うように南下すると，塩泊・石寺を経て上能野部落へ入る。ここより住吉地区となり更に南下すると下能野・形之山・浜之町・志和野を経て，深川部落入口を左手に見ることができる。由緒深く昔から集落として存在している部落といわれ，部落入口には慶安五年銘の石碑があり，また鹿児島県無形文化財に指定されている面踊りをはじめ，深川源太郎踊りなどすぐれた郷土芸能が残されている。深川より更に南下すると隣りに牧川部落があり，この間を牧川川・下二ツ川が流れ，西之表市と中種子町の区界線が引かれている。深川部落は西之表市西海岸最南部地区に位置する。

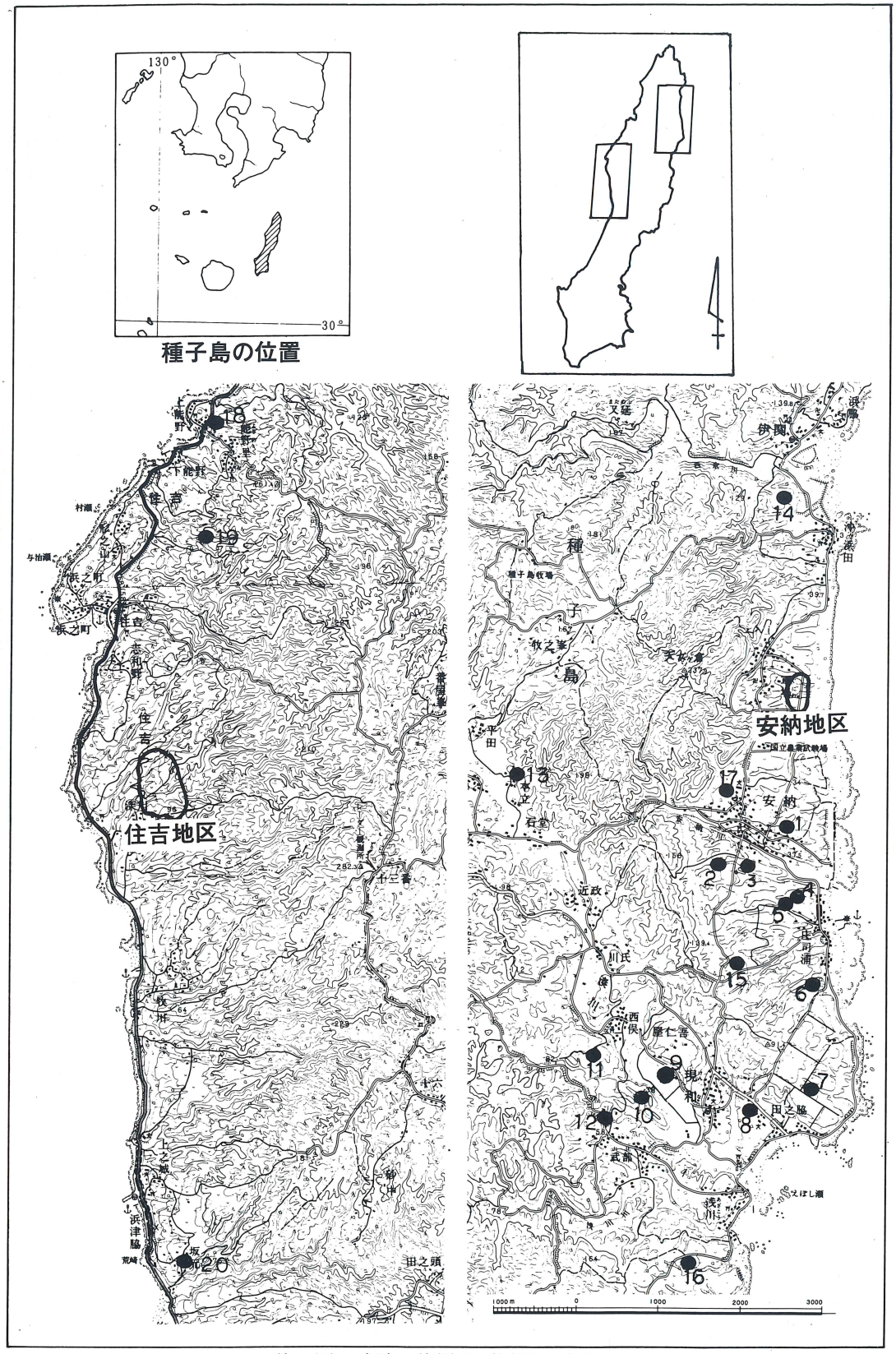
深川より浜津脇付近，およそ４キロメートルには多くの段丘が連続的に発達している地帯であり，島内の海岸段丘の発達，開折状態等の調査に於いては模式的に捕えることができ，遺跡の立地を考える上でも良好な比較資料であると考えられる。

深川地区は，島内の最高標高を計る石ノ峯から，ほぼ西側約３キロメートルに位置し，高度約１８０メートルに分布する平担面を第１段丘として，その下位に第２段丘，更に高度約７０～８０メートルに第３段丘が発達している。第４段丘は高度約４０～５０メートルに認められる。第４段丘は最も全島に普遍的に発達しているが，高度は各地によりばらつきがあるようである。第５段丘は明確に確認できないが，第６段丘が高度約３０メートル，第７段丘が高度約２０～３０メートルに連続的に発達している。

このように規則的に連続性をもって確認される各段丘面によって構成される深川地区の地形は，地区の北を流れる深川川と南を流れる牧川川・下二ツ川によって浸蝕が進み，比較的内陸部まで開折谷が発達し，この結果深川川を中心とする小規模な谷によって急傾斜を持つ台地が形成されている。

今回調査の行なわれた地点は，大部分が第６段丘・第７段丘上に相当するものと思われるがこの段丘面は現在機械による開懇が非常に進み，農家各自によるものか整備工事がなされ，遺跡の保存はきわめて悪い状態にあった。この付近では唯一発掘調査の行なわれた浜津脇・大園遺跡のような，大量の遺物・遺構の検出が期待されていた。

また隣りの牧川地区（中種子町）は，すでにホ場整備工事は終了している。



第１図　遺跡の位置及び周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	地形	時期	備考
1	峯	西之表市 安納 峯郷	平地	弥生中期	打製石斧・磨製石鏃
2	赤木	西之表市 現和庄司浦	台地	縄文前期	塞ノ神式
3	下剥峯	西之表市 現和庄司浦	台地	弥生中期～縄文前期	吉田式・石坂式・轟式・磨製石鏃
4	大四郎	西之表市 現和庄司浦	台地		曽畑式
5	内和	西之表市 現和庄司浦	台地		土師器・須恵器
6	指辺	西之表市 現和庄司浦	台地	縄文前期	曽畑式・磨石・敲石・凹石
7	東方ノ平	西之表市 現和庄司浦	台地	縄文前期	
8	田ノ脇	西之表市 現和田ノ脇	砂丘	弥生後期	埋装遺跡・貝輪
9	泉原	西之表市 現和田ノ脇	台地	弥生～縄文	耳状耳飾・磨石・磨製石斧
10	道月ノ峯	西之表市 現和		中世	土師器・須恵器
11	院房	西之表市 現和		中世	土師器・須恵器
12	武部	西之表市 現和 武部	台地	縄文後期	
13	本立	西之表市 本立	平地	縄文前期～中世	磨製石斧・打製石斧・紡錘車
14	沖ケ浜田北	西之表市 伊関沖ケ浜田	台地	縄文	石鏃
15	横峯	西之表市 現和庄司浦	台地		円形周溝遺構
16	浅川牧	西之表市 現和 浅川	台地	縄文後期	住居跡
17	大平	西之表市 安納 大平	平地	縄文後期	苦浜式
18	上能野	西之表市 住吉上能野	砂丘	弥生後期	
19	仏ケ峯	西之表市 住吉	台地		土師器
20	大園	中種子町 浜津脇	台地	縄文後期～中世	

周辺遺跡文献目録

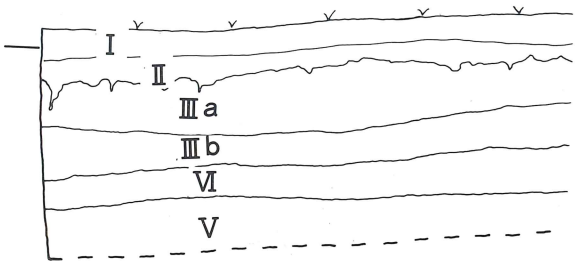
	対象遺跡No.
「種子島・屋久島発見の石器」 鹿児島考古第2号 国分直一	No. 1
「薩南諸島の考古学的調査」考古学雑誌39巻1巻 三友国五郎・河口貞徳・国分直一	No. 1
「中種子町郷土誌」 盛園尚孝	No.13・No.16・No.17・No. 1・No. 8・No. 9
「薩南諸島の先史地理的調査」 埼玉大学紀要2号 三友国五郎	No. 1
「本城・田之脇遺跡調査概報」 西之表市教育委員会 盛園尚孝	No. 8
「上能野貝塚発掘概報」 鹿児島考古第7号 河口貞徳	No.18
「指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書(5)	No. 6・No.15
「赤木・下剥峯・大四郎・内和遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘報告書	No. 2・No. 3・No. 4・No. 5

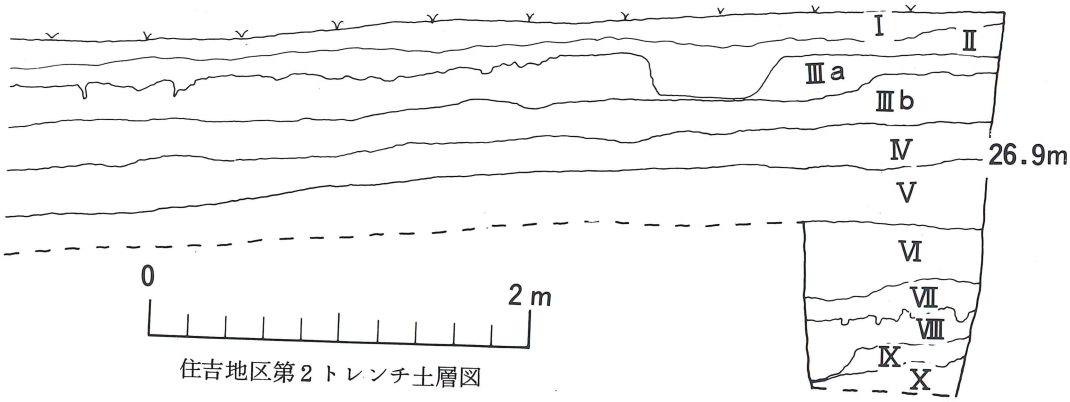
第3章 土　　層

安納地区と住吉地区では共通した層序を示したので，一括して土層の説明を行なう。

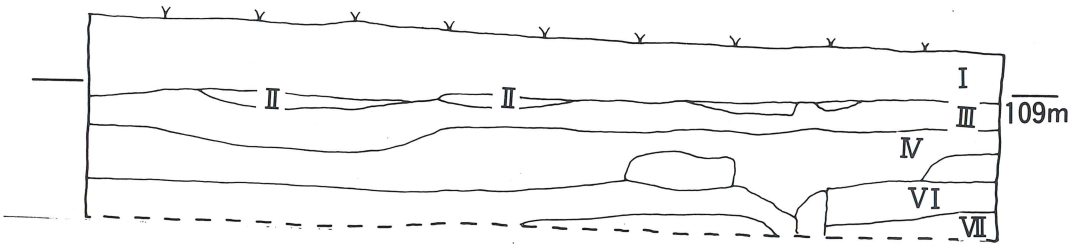
第Ⅰ層は表土で現耕作土である。機械力による開墾でかなりの覆土がみられるところもあった。第Ⅱ層は黒色土であるが，削平されたところが多く安納地区の第3～5トレンチのみで観察された。第Ⅲ層は黄褐色を呈する赤ホヤ火山灰土層で，下部にパミス層（Ⅲ6層）がある。住吉地区ではⅢの層に遺物を包含するトレンチ（第16トレンチ）があった。第Ⅳ層は茶褐色粘質土層である。安納地区（第3，5トレンチ），住吉地区（第1～4トレンチ）では遺物を包含していた。第Ⅴ層は暗茶褐色粘質土層で無遺物層である。第Ⅵ層は明茶褐色粘質土層で無遺物層である。住吉地区の第12トレンチでは明茶褐色粘質土層の下位から風化した砂岩の層があり基盤層としてとらえたが，崩壊した崖部では計3枚のパミス層がみられたもののトレンチ調査では深いため確認できなかった。

安納地区第3トレンチ土層図





住吉地区第2トレンチ土層図



第2図　土層図

第3図　安納地区地形図及トレンチ配署図

第４章　　安納地区の調査

第１節　調査の概要

安納地区は，東の太平洋へ緩やかに傾斜するところの軍場（ぐにわ）と呼ばれるところである。近年個人による農地の整備が進んでおり，旧地形を呈するところは以外と少なくなっており，第１～５トレンチのうち第３・４トレンチを設定した部分のみであった。遺構は第３・４トレンチから溝状遺構が２本，遺物は第３及び５トレンチの第Ⅳ層から貝殻条痕文土器片が数点，石器も同層から数点出土したのみであった。

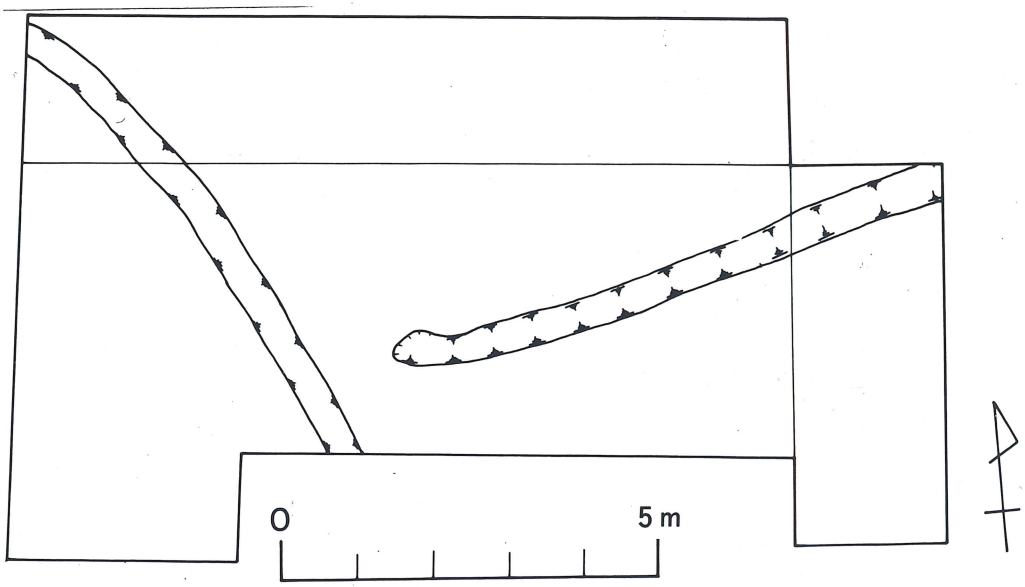
第２節　　遺　　構

第３・４トレンチから第Ⅲ層の赤ホヤ層に堀り込まれ，埋土が第Ⅱ層の黒色土の溝状遺構がそれぞれ１本ずつ計２本が確認されたので，一部拡張して検出を行った。

これらは，それぞれ独立したものであり，第３トレンチで確認された溝状遺構１は北西から東南の方向へゆるやかなカーブを描きながら，やや深くなるものである。又第４トレンチで確認された溝状遺構２は，溝状遺構１とほぼ直角にあり，やや直線的に東進し，深くなるものである。

溝状遺構１は幅50㎝で，深さは北側で12㎝，南側で22㎝を測り，断面は浅い「Ｕ」字状を呈する。溝状遺構２は，幅50㎝前後で深さは西で10㎝，東で50㎝を測り，断面は１同様「Ｕ」字状を呈する。

埋土からは遺物の出土はなく，時代及び性格共に不明な点が多いが，地形の低い方へ深くなっていく点から排水溝として考えることもできよう。



第４図　溝状遺構

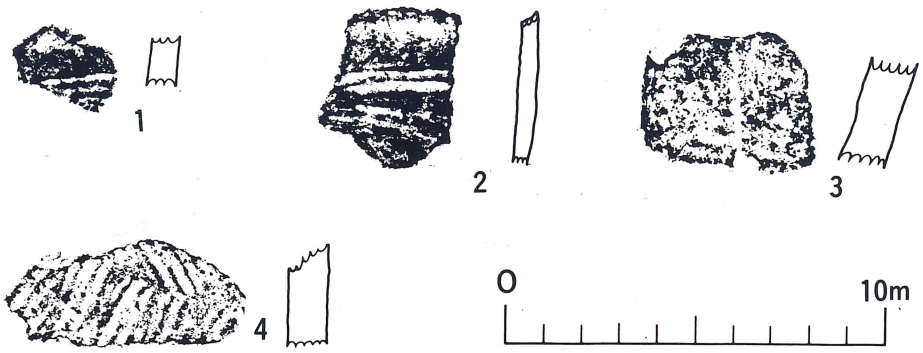
第3節　遺　　物

1. 土　器

安納地区における遺物の出土は少なく，その上図化できるものも少なかった。

1・2が第5トレンチから，3・4が第3トレンチからの出土である。共に第4層から出土した貝殻条痕文土器片である。

1は，外面に貝殻条痕文を横位に施し，内面はなで仕上げである。胎土に細砂粒を含み，焼成はやや悪い。色調は内外共黒褐色を呈する。2は，内外面共に横位の貝殻条痕文を施すものである。胎土に細砂粒を含むもので雲母等も観察される。焼成は良く，色調は黒褐色を呈する。3は，外面に浅い貝殻条痕文を施し，内面はなで仕上げである。胎土に砂粒を含み，焼成はやや悪い。色調は茶褐色を呈する。4は，外面にやや深い貝殻条痕文を施し，内面はなで仕上げである。胎土に砂粒を含むが，黒曜石が観察できる。焼成は良く，色調は外面が茶褐色，内面が黒褐色を呈する。4は出土層がローム質であったために風化が進んでいたので合成樹脂（サンコールＳＫ－50）を塗布して硬化を行った。



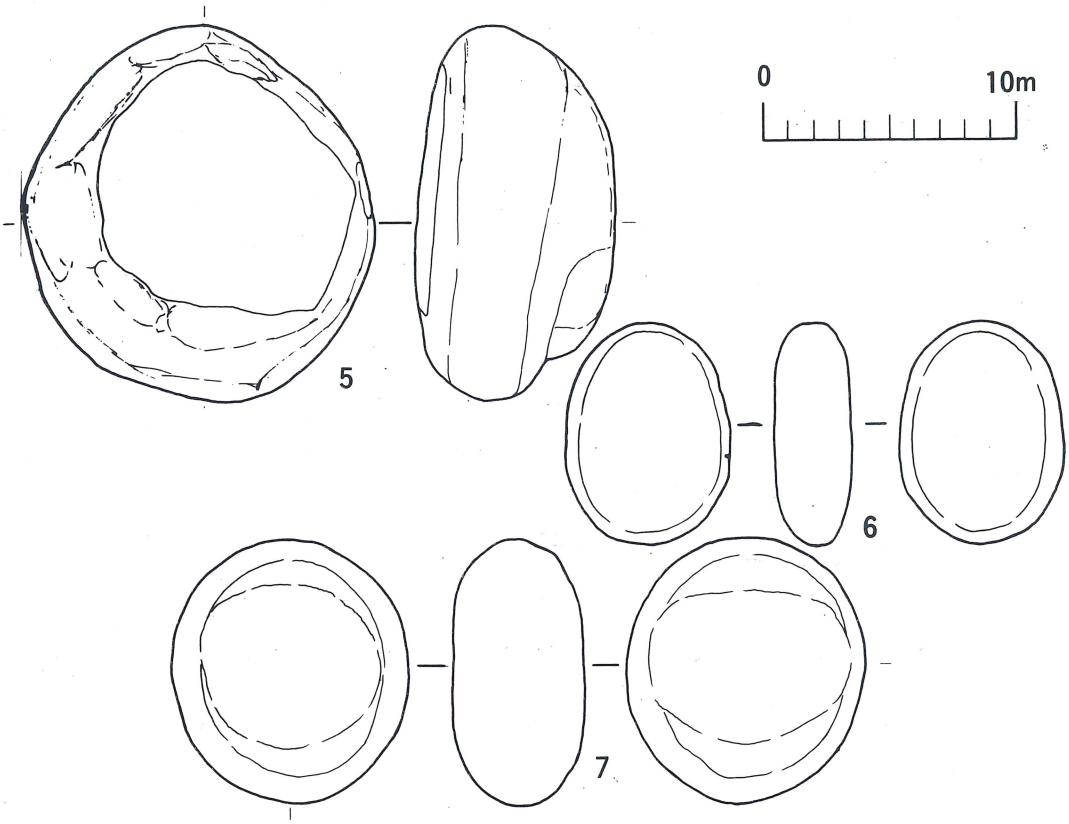
第5図　安納地区出土の土器

2. 石　器

5は，半球形に近い形をしたもので，研磨により片面が平らになったものである。6は，楕円形を呈するものである。7は出土遺物ではなく，周辺で採集されたものである。球形に近い形を呈するものである。

第2表　安納地区出土の石器計測表

No.	トレンチ	層	遺物	石材	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　　考
5	3	Ⅲ	磨石	砂岩	14.8	13.9	7.8	1,727	
6	1	Ⅲ	〃	〃	8.8	5.5	3.1	254	
7	採　集		〃	〃	10.5	9.4	5.2	742	



第６図　安納地区出土の石器及び採集石器

第４節　小　　結

安納地区の俣江遺跡周辺は，近年個人による基盤整備等が盛んに行なわれたために包含層等が攪乱されているところが多かった。かろうじて残っている地区で確認調査を実施したところ溝状遺構２本と少量の遺物を検出できた。

遺構について

溝状遺構は，前述したように排水路的な性格ないしは区画を意図したと考えられるものであるが，トレンチ調査のため速断できない。又時期についても，埋土からの遺物の出土がないために時期を決定するまでには至らなかった。

遺物について

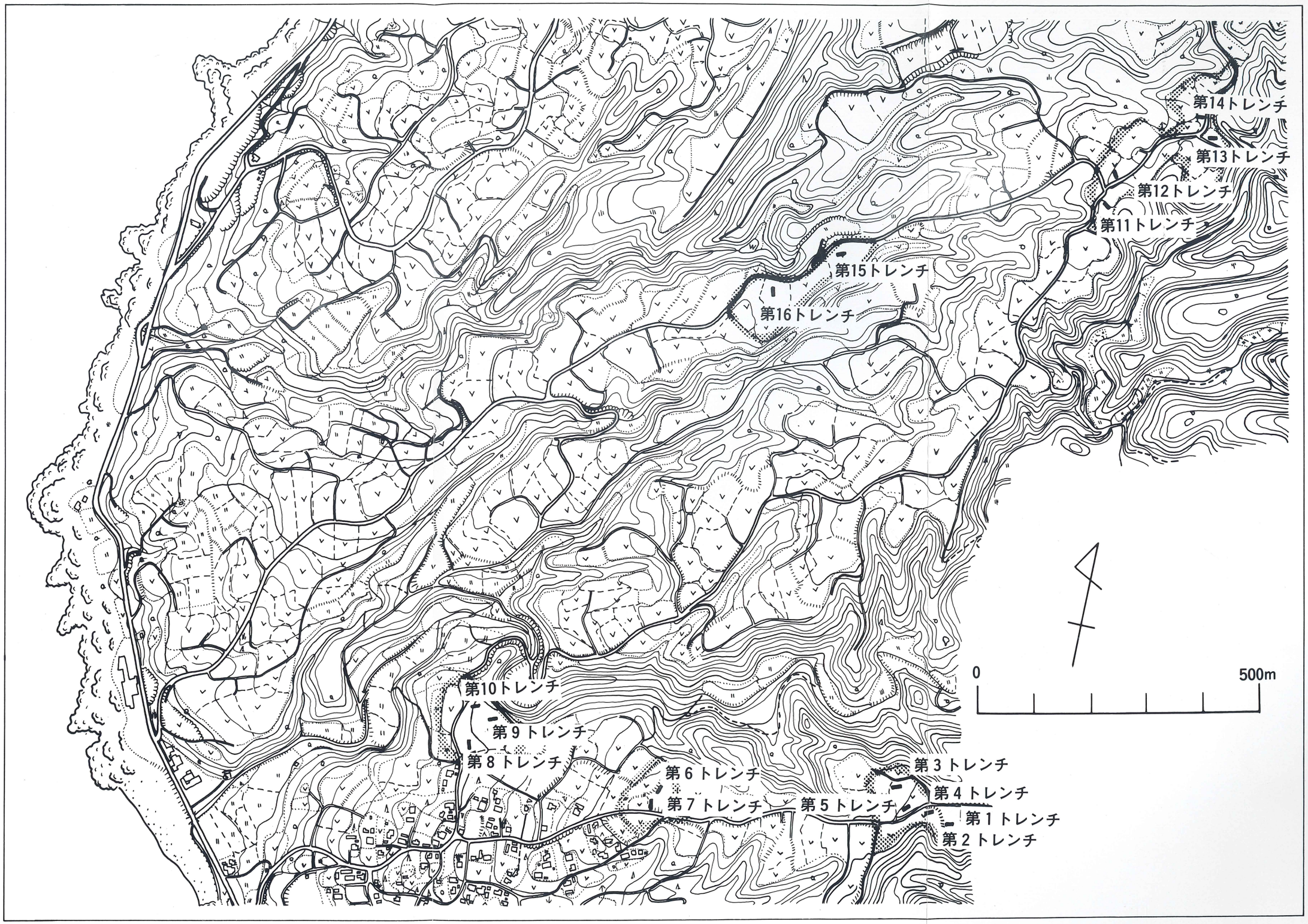
遺物は主として，Ⅲ層（鬼界カルデラに噴出源を求められる赤ホヤ層）の下位から出土しており，縄文時代の早期から前期にかけての遺物であることが考えられる。[1] 貝殻条痕文土器を施すものは，西之表市下剥峯遺跡出土の貝殻文系土器（Ⅱの類）と対比できるものであろう。

今後，Ⅲ層（赤ホヤ層）を鍵層とした上下関係の問題は既に指摘されており，[2] 本土において下位から石坂式・吉田式・前平式・塞ノ神式土器等の貝殻文系土器が出土しており，[3] 種子島における編年的研究もさらに進展していくものと考えられる。

石器では，砂岩製のもので浜石を利用したと考えられるものである。

註

1. 町田　洋　「火山灰は語る」　1977　蒼樹書房　他
2. 新東晃一・立神次郎　「下剥峯遺跡」　西之表市教育委員会　1978. 3
3. 2に同じ


第14トレンチ
第13トレンチ
第12トレンチ
第11トレンチ
第15トレンチ
第16トレンチ
第10トレンチ
第9トレンチ
第8トレンチ
第6トレンチ
第7トレンチ
第5トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
第1トレンチ
第2トレンチ
0
500m

第 5 章　住吉地区の調査

第1節　調査の概要

住吉地区は，西の東シナ海へ段丘状に漸次傾斜していく「深川」と呼ばれている地区が対象である。安納地区よりもさらに個人による農地の整備が盛んに行われていることが顕著にうかがえ，階段状の畑地が連続するところでもあり，旧地形をとどめる所はきわめて少ない状況である。このことは，トレンチ調査を進めていく過程でさらに明らかとなり，赤ホヤ層（Ⅲ層）より上部が残っている地区は第1～4トレンチを設定した部分のみで，他のトレンチにおいては赤ホヤ層（Ⅲ層）より下位まで消失（削平）している部分さえもあった。

以上のような状況ではあったが，第1～4，第15・16トレンチから遺物を包含する層を確認できた。

第2節　遺　　物

住吉地区における遺物の出土は第1～16トレンチのうち，第1～4，15・16トレンチから出土した。出土層位は第Ⅳ層から出土したものが中心である。又，周辺から多量の土器や石器が採集されたので発掘調査により出土した遺物と採集遺物とに分けて記述する。

1.　出土遺物

①　土　器

第Ⅳ層の茶褐色粘質土層から出土したもので，ほとんどが破片で完形品の出土はなかった。

Ⅰ　類

8は第16トレンチの第Ⅲ層から出土したもので，貼り付け突帯を2条横位に付す口縁部片と考えられるものである。調整は内外ナデ仕上げである。胎土に砂粒を含む。黒曜石の小破片も含まれている。焼成はやや悪く，色調は黒褐色を呈する。

Ⅱ　類

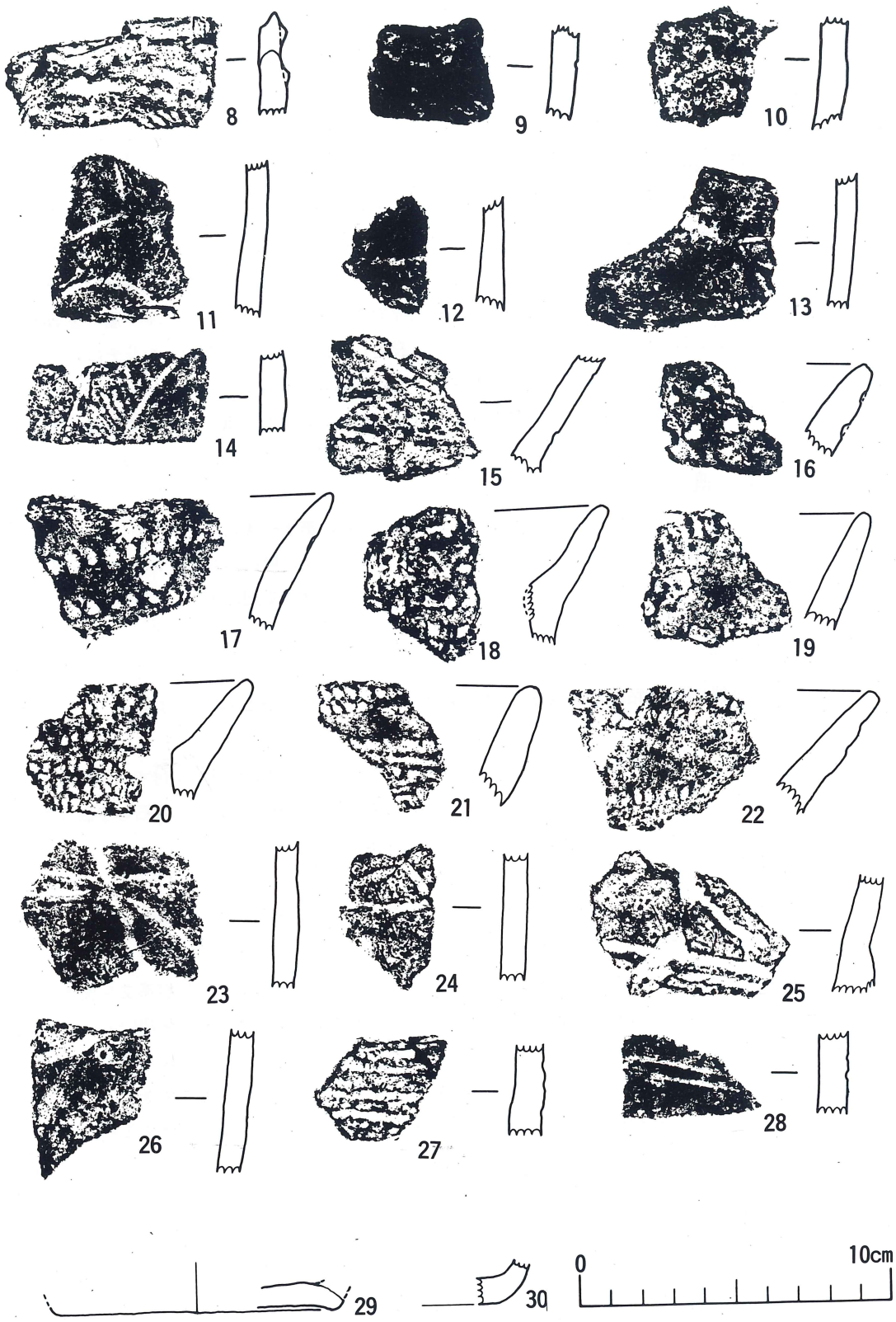
9・12が第1トレンチから，10・11・13・15が第2トレンチから，14が第4トレンチから，それぞれ出土した。

9～14が胴部片，15が口縁部の頸部近くの破片である。2本の沈線間に回転撚系文を施すものである。10・11・13の撚系は細いものを，15が前述のものよりやや太いものを用いている。胎土に砂粒を含むのは共通するが，15には黒曜石の破片が含まれている。破片は　弱である。このことは，焼成の良否によるものか包含層が粘質土であるためなのかは速断できない。色調は，9・12・15が内外茶褐色を，10・14が内外黒褐色を呈し，13では黒褐色を呈する部分と茶褐色を呈する部分とがある。

Ⅲ　類

20が第1トレンチ，16～19，22が第2トレンチから出土したものである。

全て口縁部片である。「く」字状に開く形を呈し，直線的に開くもの（19・21・22），やや外反気味に開くもの（17），やや内湾気味に開くもの（18・20）とに細分することができる。



第８図　住吉地区出土の土器

文様は，アナダラ属の貝の腹縁部を用いて施されたものである。貝殻腹縁の肋を２～３条利用して連続して施すものであるが，21では口縁端近くに横位の連続刺突文を施している。胎土に砂粒を多く含み，破片は脆弱であることは２類と同様である。色調は，17・19～22は茶褐色を16・18が灰褐色を呈している。19・20は焼成がやや悪いのか，表面は茶褐色を呈するが，内部は黒褐色を呈することが断面で観察でめる。25は底部くの破片と考えられる。

Ⅳ　類

23～25・28が第２トレンチ，26が第４トレンチ，27が第15トレンチからそれぞれ出土した。

全て沈線文を施す胴部破片である。23～26は２類の施文のうち回転撚系文が磨滅したものとも考えられるが，一括してこの類に含めて記述する。27は３条の横走する沈線文が，28は２条の横走する沈線文がヘラ状施文具により施されている。胎土は23～28に砂粒を多く含み，25は小礫をも含んでいる。色調は茶褐色を呈するのがほとんどであるが，25は内部が黒色を呈するのが断面で観察できる。土器片の脆弱なことは２・３類と同様である。

底　部

29が第３トレンチから，30が第４トレンチから出土したものである。

29は底部径９㎝のものである。断面から，円盤状の縁辺部に粘土を積みあげ順次胴部をつくりあげていくことが観察できる。胎土に砂粒を多く含み，色調は茶褐色を呈するが，断面中は黒色を呈している。30は底部片である。胎土に砂粒を含み，暗茶褐色を呈する。29・30とも脆弱である。

以上の出土土器片は，脆弱で剥離等がはげしいため合成樹脂（サンコールーＳＫ－50）を用いて表面硬化を行ったため，土器の表面は多少ヌレ色を呈している。

②　石　器

敲　石

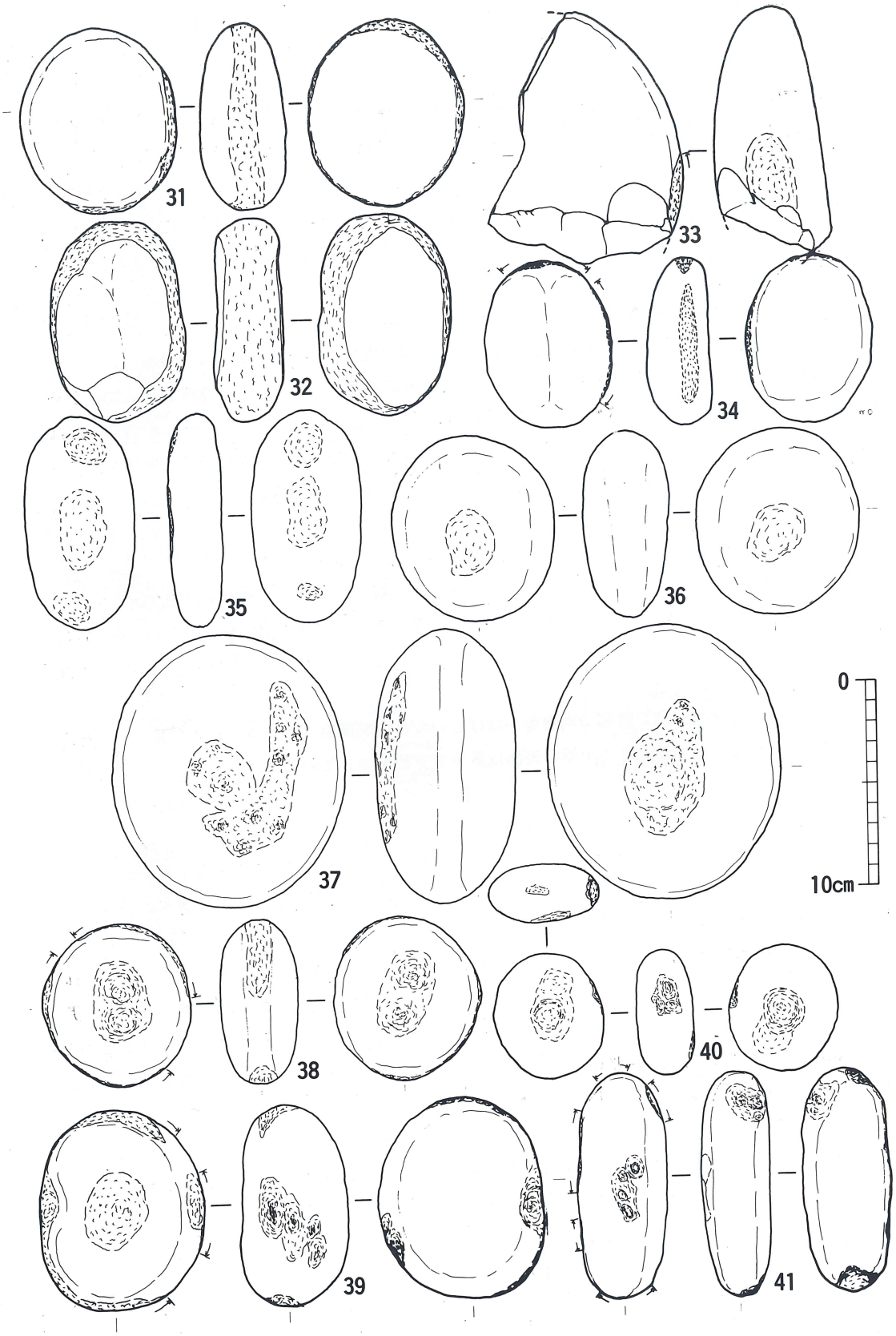
33が第16トレンチの第Ⅰ層から，35・40・41が第１トレンチ，37・38が第２トレンチ，32・34・36が第４トレンチ，39が第６トレンチ，31が第16トレンチの第Ⅳ層からそれぞれ出土したものである。

31～40が楕円形ないしは円形に近い形を呈し，41は長楕円形を呈するものである。使用された部位によりいくつかに細分できる。31・32は側面の全周を使用し，33・34は側面の一部を使用し，35は両面を数ケ所，36・37は両面の中央部のみを使用し，38～40は側面の一部と両面の中央部を使用し，41は先端部を使用したものである。使用痕からみて使用頻度はさほど多くないと考えられる。材質はすべて砂岩である。

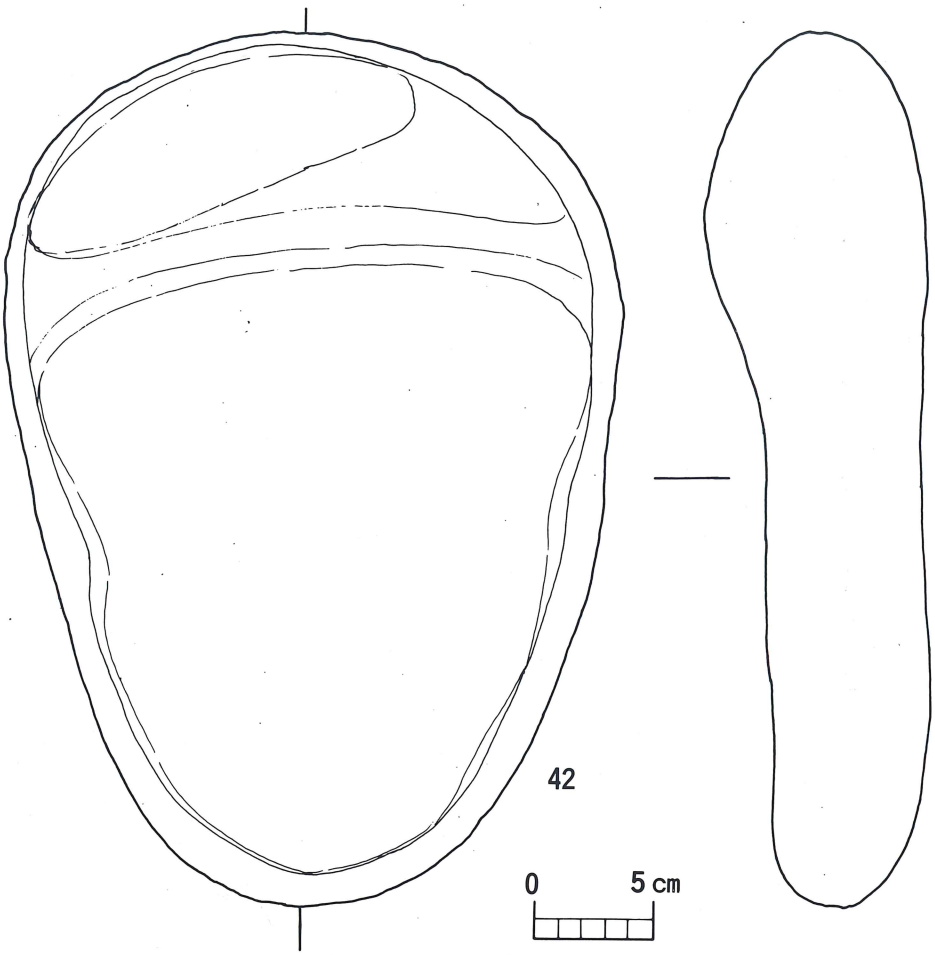
石　皿

42が石皿と考えられるもので，第１トレンチ第Ⅳ層から出土したものである。

卵形を呈し，断面は２段となり両者とも研磨痕を残している。長さ37.2㎝，幅26.3㎝，厚さ9.4㎝，重さ11.5㎏を測る砂岩製のものである。



第９図　住吉地区出土の石器(1)



第10図　住吉地区出土の石器－２

第３表　住吉地区出土の石器計測表　　( )内は残存部計測値

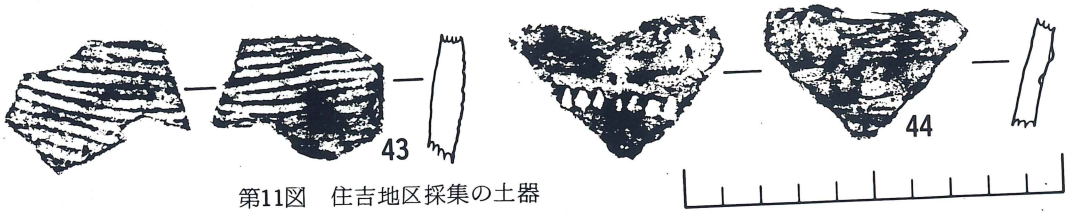
No.	トレンチ	層	石　器	石　材	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
31	16	Ⅳ	敲　石	砂　岩	9.2	7.6	4.1	373	
32	4	Ⅳ	〃	〃	9.9	6.6	3.5	303	
33	16	Ⅰ	〃	〃	(12.1)	(9.1)	(5.1)	(725)	破　損
34	4	Ⅳ	〃	〃	8.2	6.2	3.2	218.5	
35	1	Ⅳ	〃	〃	10.4	4.3	2.6	221	
36	4	Ⅳ	〃	〃	9.1	8.0	4.2	426.5	
37	2	Ⅳ	〃	〃	13.4	11.4	6.9	1,414.5	
38	2	Ⅳ	〃	〃	8.1	7.3	3.8	293.5	
39	6	Ⅳ	〃	〃	9.9	8.0	5.3	597.5	
40	1	Ⅳ	〃	〃	6.2	5.4	2.9	126.5	
41	1	Ⅳ	〃	〃	11.0	4.0	3.4	230.5	

2. 採集遺物

① 土 器

43・44の2片が図化できたもので細片等を含め第16トレンチ周辺から採集された。

43はアナダラ属の貝殻復縁による条痕文を内外共に施す胴部片である。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。色調は灰褐色を呈している。44は断面三角形の貼り付け突帯を付し，その下位に刺突連点文を横位に施すもので，地文に貝殻条痕を施している。内面にも貝殻条痕を施している。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。色調は外面が黒褐色，内面が茶褐色を呈している。



第11図 住吉地区採集の土器

② 石 器

ほとんどの石器が第16トレンチの周辺から採集されたものである。

敲 石

ほとんどが楕円形ないしは円に近い形を呈するものであるが，長楕円形（46・51），半円形（48）を呈すものもある。

使用された部位により，端部を使用したもの（45・46），側辺を使用したもの（47・48），両面の中央部を使用したもの（49），両面の中央部と端部を使用したもの（50〜52），両面の中央部と側辺部を使用したもの（53〜68）に分類できるが，側辺部を使用したものについては，さらに全周を使用したもの（59〜65）と全周全てを使用していないものとに細分できる。

これらの敲石は使用痕からみて使用頻度の少ないものが中心である。48はこれらのうち使用頻度の高いもので，破損した後もさらに再利用されたものと考えられる。石材はほとんどが砂岩である。

凹 石

69は，砂岩製の凹石である。円形状を呈していた敲石をさらに再利用したものである。縁辺部と直線部に敲打痕がみられ，両面の中央部に凹みがみられる。この凹みが使用頻度の高さにより敲打の結果凹んだとするなら敲石の項に含めるべきかもしれない。

磨製石斧

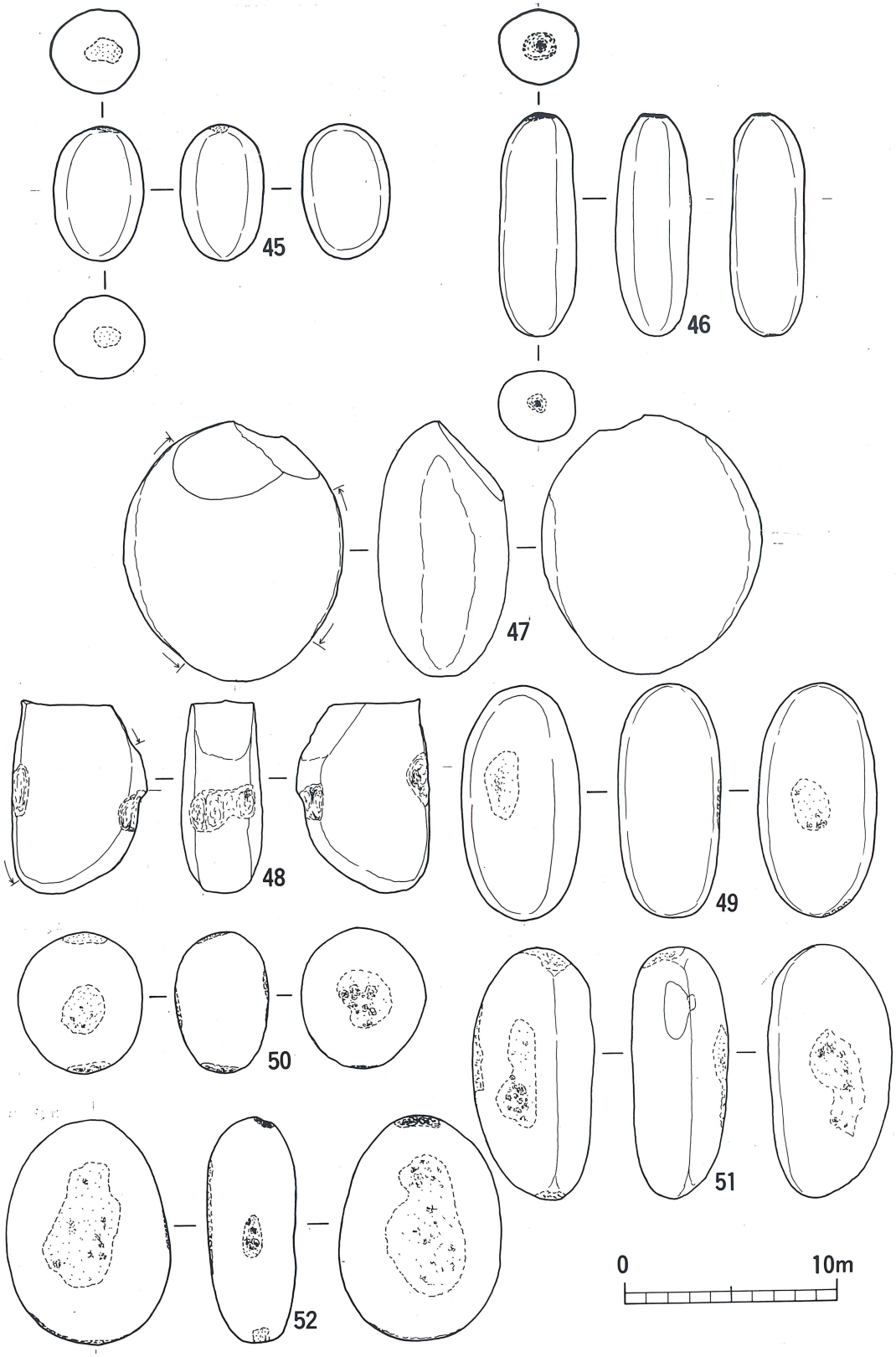
70は，長さ8.2㎝，刃部幅3.9㎝，最大厚み9.5㎜の台形状を呈するものである。全面に研磨時の擦痕を残す。71は，長さ23.2㎝，最大幅9㎝，最大厚み3.1㎝を測る長楕円形を呈するもので，刃部も弧を描く。この石斧は剥離による整形の後片面の凸部と裏面の刃部のみを研磨したもので，表の両側には剥離面を残している。70・71共に緑泥岩様の石材を利用してつくられている。

石　皿

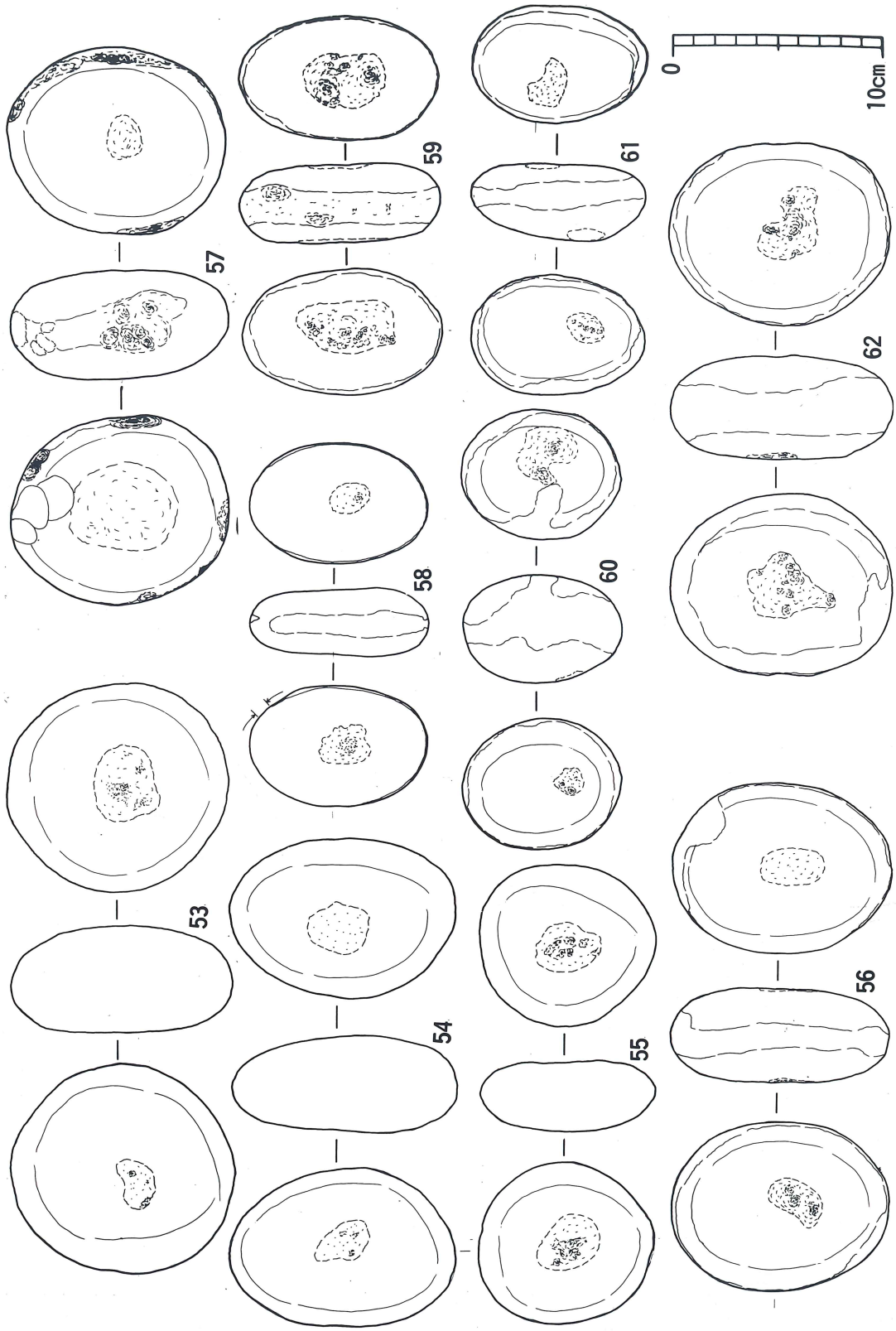
72は石皿の破片で，五角形を呈するものである。使用面は残存部の約半分に研磨痕が残る。石材は砂岩である。

第4表　住吉地区採集石器計測表　　( )内は残存部計測値

No.	トレンチ	層	器　種	石　材	長さ (cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ (g)	備　考
45	表　採	採	敲　石	砂　岩	6.4	4.2	3.9	141	
46	〃	〃	〃	〃	10.5	3.6	3.5	201.5	
47	〃	〃	〃	〃	(12.0)	10.3	6.1	(960)	破　損
48	〃	〃	〃	〃	9.0	6.2	3.8	306	再利用
49	〃	〃	〃	〃	11.0	5.1	4.8	424.5	
50	〃	〃	〃	〃	6.6	5.8	4.4	221	
51	〃	〃	〃	〃	11.8	5.3	4.6	413	
52	〃	〃	〃	〃	10.6	7.7	4.2	513.5	
53	〃	〃	〃	〃	10.5	10.0	5.0	735	
54	〃	〃	〃	〃	10.7	7.5	4.6	516	
55	〃	〃	〃	〃	8.3	7.7	3.3	294.5	
56	〃	〃	〃	〃	10.3	8.1	4.5	539	
57	〃	〃	〃	〃	10.3	9.0	5.1	638	
58	〃	〃	〃	〃	8.5	5.7	3.3	223.5	
59	〃	〃	〃	〃	9.5	6.0	3.7	296	
60	〃	〃	〃	〃	7.5	6.2	5.1	311	
61	〃	〃	〃	〃	8.2	5.7	3.7	225	
62	〃	〃	〃	〃	10.5	8.6	5.0	600.5	
63	〃	〃	〃	〃	11.0	9.5	4.1	619.5	
64	〃	〃	〃	〃	7.6	6.6	3.0	229.5	
65	〃	〃	〃	〃	8.0	5.7	4.4	267.5	
66	〃	〃	〃	〃	7.1	5.1	4.0	186	
67	〃	〃	〃	〃	12.4	6.0	2.9	379	
68	〃	〃	〃	〃	11.8	9.0	4.2	660	
69	〃	〃	〃	〃	5.6	8.9	3.6	227	再利用
70	〃	〃	石　斧	緑泥岩	7.2	3.3	0.8	29.5	
71	〃	〃	〃	〃	20.3	7.7	2.8	617	
72	〃	〃	石　皿	砂　岩	(27.0)	(25.7)	(7.1)	(6,760)	破　損

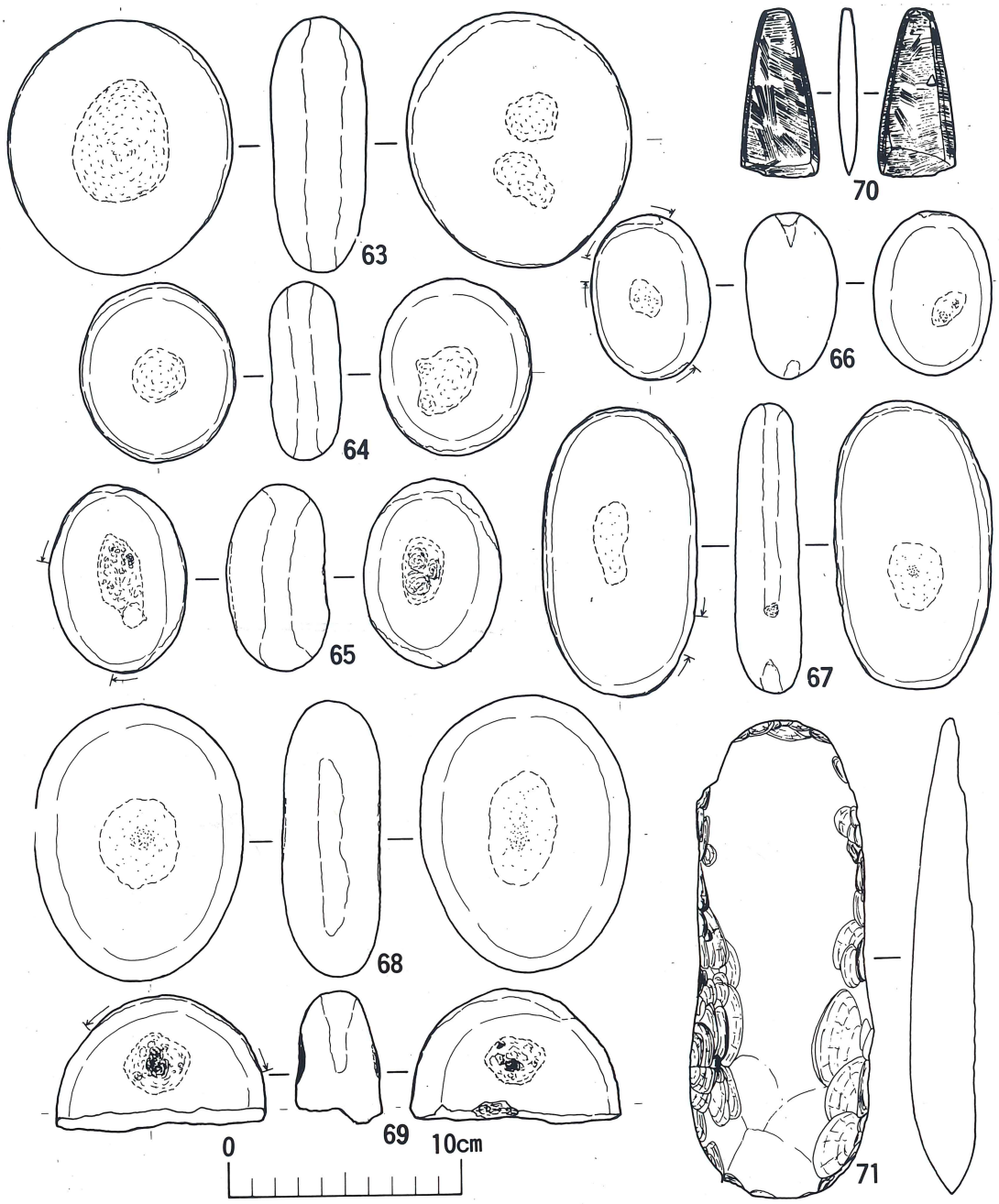


第12図　住吉地区の表採資料

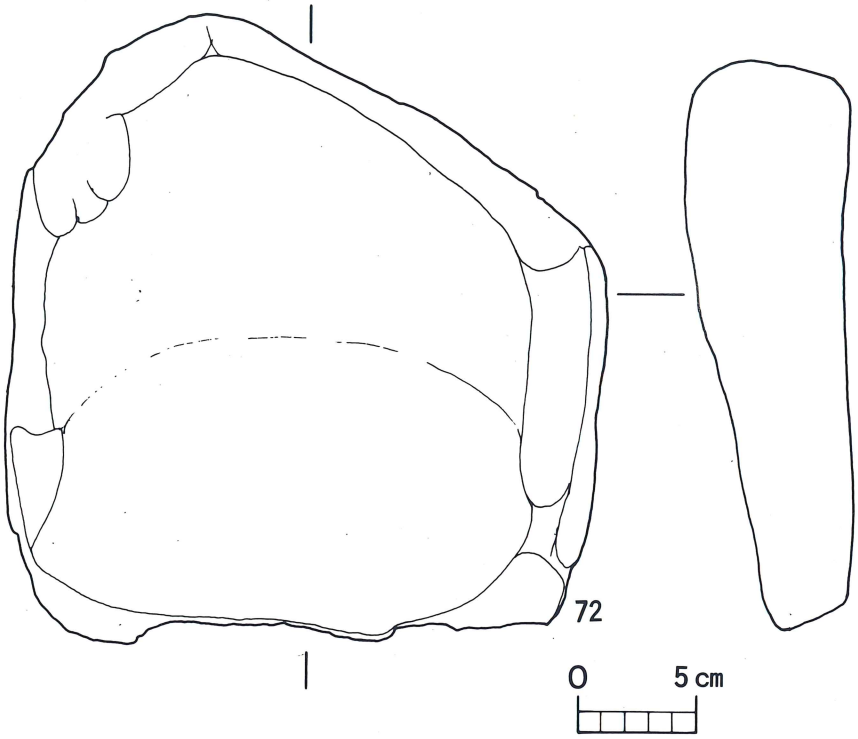


第13図　住吉地区採集遺物

第13図　住吉地区採集遺物



第14図　住吉地区の表採集遺物



第15図　住吉地区採集の石器－4

第３節　小　　結

住吉地区も，安納地区同様近年の個人による畑地の基盤整備が盛んに行なわれているため，包含層が削平されている地域が多かった。層序がかろうじて残っている地区はさほど多くなかったが，周辺からは多量の石器を採集することができた。

遺物は，第Ⅲ層（鬼界カルデラに噴出源を求められる赤ホヤ火山灰土）の下位第Ⅳ層から出土した。出土土器のうち貼り付け突帯を付す８は，第Ⅲ層の赤ホヤ火山灰土層[1]中から出土しており，縄文時代前期の轟式系統のものと考えられるものである。２・３類は，縄文時代前期の塞ノ神式に比定でき，さらに３類が塞ノ神Ａｂ式，４類が塞ノ神Ｂｄ式に細分されよう。４類の中には[2]塞ノ神Ａｂ式に加えるべきものも存在する。

採集された土器のうち44は，西之表市現和田之脇遺跡から採集されたものに類似しており，そこは住吉地区の反対側の太平洋岸にあり，今後の資料の増加等による比較[3]検討が必要であろう。

出土石器は42の石皿を除いて全て敲石である。これら敲石の大半が使用頻度の少ないものである。周辺から採集された石器類も使用頻度が少ないものも多く，中心的なものである。このことは，石材の豊富さからくることによるものであろうか。すべて手頃な砂岩の河原石ないしは浜石を利用したものであろう。形態は楕円形ないしは長楕円形のものである。長楕円形では基端を使用している。楕円形のものでは，側辺部のみ使用するもの（31～34・47），表裏のみ

使用するもの（35〜37・49），表裏と側辺部共使用するものの3種に大別されるが，さらに側辺部のみに限ってみると，全周使用されるものと，一部使用したものに細分できるものの，形態における統一性はあまりみられない。これら敲石のうち69は使用頻度の多さのためか凹んでいる。48は両側の凹みから石錘としての利用も考えられるものの断定はできない。他の石器では小形の磨製石斧（70）があり，全面に研磨痕を残している。71の石斧は調整剥離痕を残すやや大形のもので，裏面は刃部のみの研磨である。これら採集石器は採集土器が少ないこともあわせ，時期を決定するまでには至らなかったが縄文時代に属するものと考えられる。なお，石皿の出土及び採集品により生活址の可能性を周辺に求めることもできよう。

註

1. 町田　洋　「火山灰は語る」　蒼樹書房　1977
2. 河口貞徳　「塞ノ神式土器」　鹿児島考古　第6号　1972
3. 西之表市種子島開発総合センターに展示・公開されている。

第 6 章　まとめにかえて

安納地区（俣江遺跡）と住吉地区（高峯遺跡・　　）の確認調査の結果，多くの部分で個人の農地開発により削平が行なわれてはいたものの，前述したようにいくらかの成果が得られ，周辺に生活址の存在する可能性があることも得られた。

両地区において，第Ⅲ層と第Ⅳ層に包含層が確認できた。第Ⅳ層は縄文時代早〜前期の遺物を包含していることは，すでに下剥峯遺跡において確認・指摘されていたことであるが，東シナ海側でも確認されたことは意義あることである。

西之表市管内における遺跡は，縄文時代から歴史時代まであり，縄文時代の遺物を出土した指辺遺跡・下剥峯遺跡，弥生時代の遺物を出土した下剥峯遺跡・上能野貝塚など発掘調査された遺跡も少なくない。今後，西之表市のみならず種子島地区における調査研究によりさらに古代史の解明がなされていくことであろう。

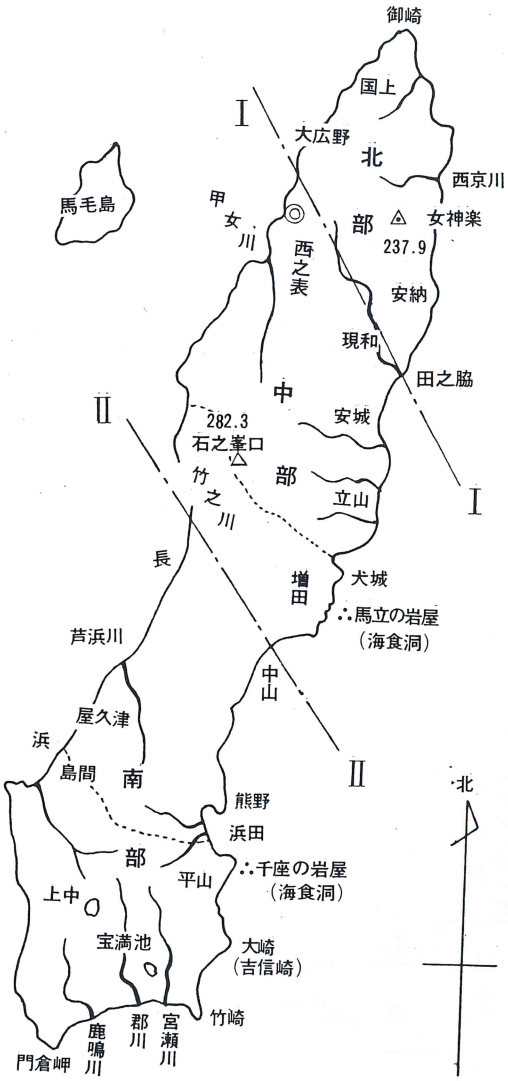
《付　　録》

この付編の資料は，種子島の古代を知るうえで，直接・間接に参考になる地質に関する資料を，下記の記録より転載したものである。

〔種子島の自然　種子島地学同好会　西之表市社会教育　編〕

西之表市社会教育委員会

種子島の地形

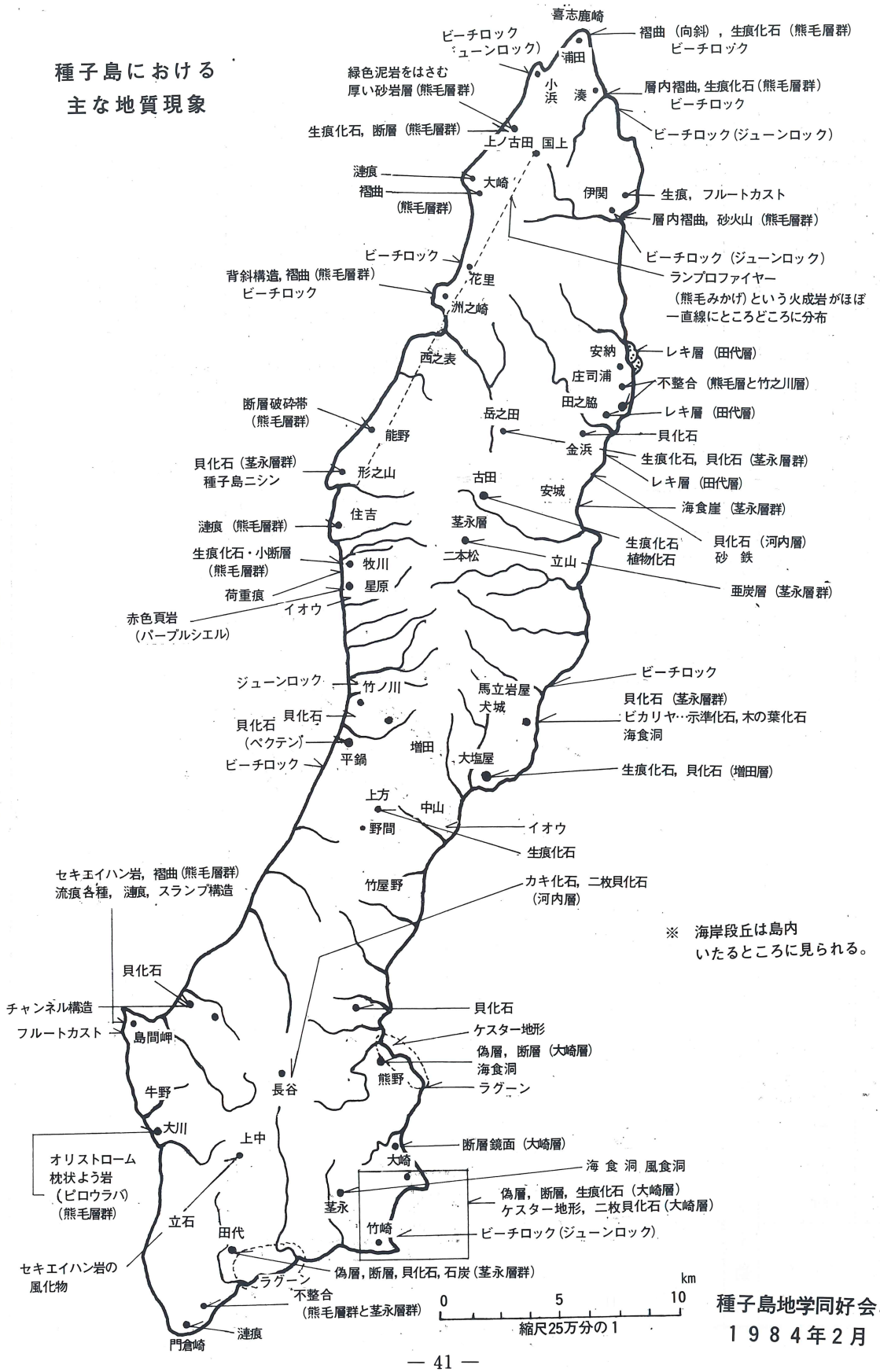


鹿児島大学理学部教授
早　坂　祥　二

種子島の地質層序

地質時代				種子島に発達する地層名	地層柱状図	地層の厚さ(m)	岩質	産出化石			分布
新生代	第四紀		完新世（沖積世）	沖積層			砂丘（新・旧２種類）や河川に見られる未固結の砂や礫の堆積物				西，南海岸に多い 各河川沿いや河口
				（不整合）							
			更新世（洪積世）	火山灰層		最大 4.5	黄褐色ローム層・最上部に黒色火山灰層・中，下部に黄色軽石層をはさみ，互層状である				海抜40m以上の地表を覆って全島に分布する
				（不整合）							
				竹之川層		10	茶褐色～赤褐色粘土質砂 基底に礫を伴いしばしば砂鉄を含有する				中種子町竹之川から屋久津に至る西海岸地帯に分布する
				（不整合）		5	砂岩の亜角礫（巨礫～細礫）よりなる				中種子町中田より南，門倉崎に至る地域(海抜100～170m)に分布する
	第三紀	新第三紀	鮮新世	増田層		20 ～ 100	淡褐色～茶褐色・細粒～中粒砂（やや泥質） 斜交層理の発達した礫質部 化石の点在する泥質部を一部にともなう	二枚貝 巻貝 腕足類	（外洋沿岸性）		種子島中部（中種子町地域）に主として分布し，熊毛層群の侵食面を覆って低平な丘陵地を作っている
				（不整合）							
			中新世	茎永層群 大崎層		700	赤褐色～黄褐色，中粒砂岩，小礫よりなる礫層をしばしば挾む	有孔虫 二枚貝 巻貝 ウニ，カニ	（外洋浅海性 内湾性）		主に種子島南東部(南種子町地域）に分布する 分布の北方延長は，東岸沿いに西之表市現和付近に達する
				河内層		320	青灰色泥岩。最下部，最上部にしばしば砂岩薄層を挾む				
				田代層		430	円磨された巨礫～中礫よりなる礫層，上部に砂岩層を挾む				
				（不整合）							
		古第三紀	漸新世	熊毛層群	断層	4500	中粒砂岩の厚層をひんぱんに挾在する，砂岩優勢砂泥互層	二枚貝 巻貝	生痕化石	環虫類（棲管）	種子島・馬毛島全域に基盤岩層として分布する
			始新世		断層		砂岩，泥岩の等量～砂岩優勢互層	放散虫			
							砂岩や泥岩の礫などを不規則に混在する黒灰色頁の乱堆積層				

種子島における主な地質現象



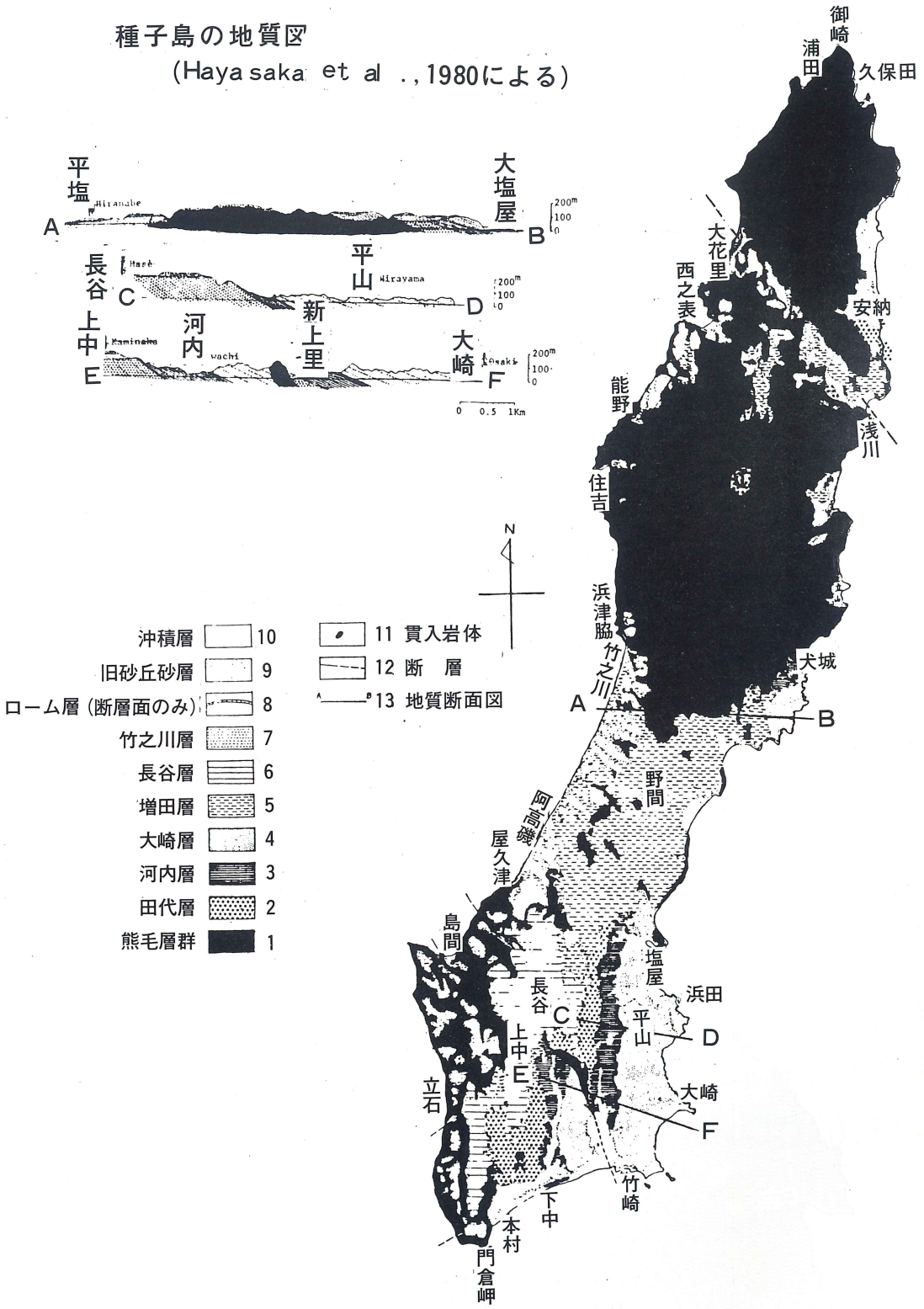
種子島地学同好会
1984年2月

地　史　年　表

時代区分（数字は絶対年代）			生物の変遷 動物	生物の変遷 植物	地史 日本	地史 鹿児島
新生代	第四紀 200万年	沖積世（完新世）	ホニュウ類	被子植物		桜島・開聞岳・霧島火山の活動，形成
		洪積世（更新世）	人類の出現	被子植物の繁栄	氷河と火山の時代（関東ローム）	姶良，阿多，鬼界カルデラの形成（シラス）琉球石灰岩
	第三紀 新第三紀	鮮新世			糸魚川―静岡線の形成	国分層，永野層，吉田貝化石層
		中新世			日本の石油，グリーンタフ層の形成	金山（串木野，枕崎，永野）花崗岩類の貫入（屋久島，南大隅など）種子島の茎永層
	第三紀 古第三紀	漸新世	カヘイ石の繁栄		日本の主な炭田	
		始新世			フォッサマグナの形成	四万十層群……
	7千万年	暁新世	ホニュウ類の出現繁栄		中央構造線の形成（佐川造山運動）	
中生代	白亜紀 1億3500万年		ハチュウ類・アンモナイト	被子植物の発展	鳥ノ巣石灰岩	獅子島，甑島の御所浦層，姫浦層
			キョウリュウ，アンモナイトの絶滅	ソテツ・イチョウ類の繁栄		
	ジュラ紀 1億8千万年		鳥類・ホニュウ類の出現繁栄	裸子植物	三波川変成岩形成	野間岬の石灰岩
	三畳紀 2億2500万年		ハチュウ類，アンモナイトの発展	被子植物の出現	大嶺炭田（秋吉造山運動）	
古生代	二畳紀 2億7千万年		両生類 魚類	ソテツ類の発展	地向斜時代（秩父古生層）	
			三葉虫の滅亡	シダ植物		
	石炭紀 3億5千万年		フリズナの繁栄	大型シダ植物		奄美大島の古生層
				ロボク，リンボク		阿久根，川内，久多島の古生層
	デボン紀 4億年		最初の陸上動物（両生類）の出現	フウインボクの繁栄		
				裸子植物の出現	浅海から地向斜へ	
	シルル紀 4億4千万年		海生無セキツイ動物	海生藻菌・植物		
				最古の陸上植物		
				プシロフィトンの出現		
	オルドビス紀 5億年		魚類出現		日本最古の化石	
				海藻		
	カンブリア紀 6億年		三葉虫，腕足類，サンゴ，フデイシなど繁栄		大陸時代	
先カンブリア代						

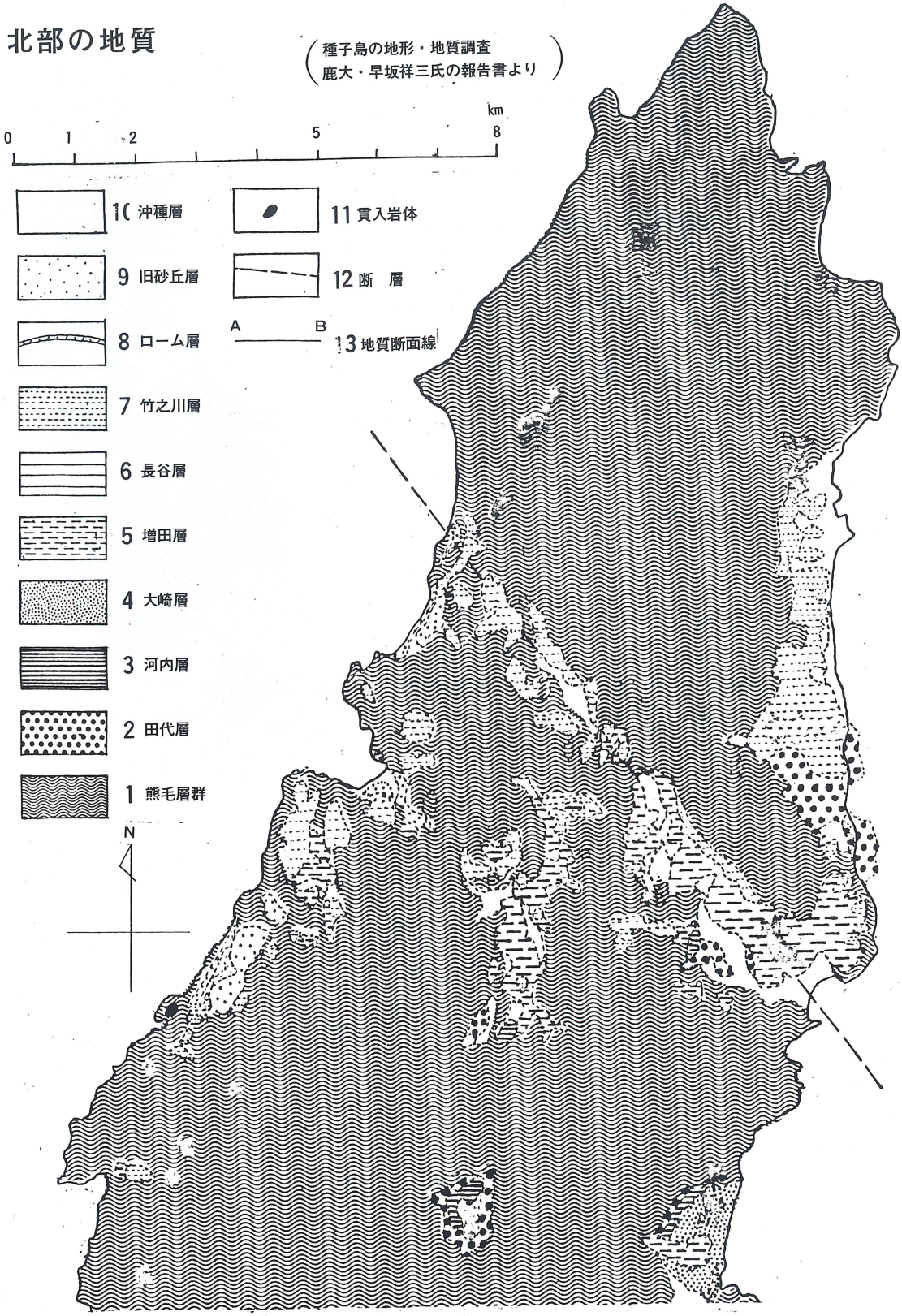
茶の間の地球科学（南郷出版）より

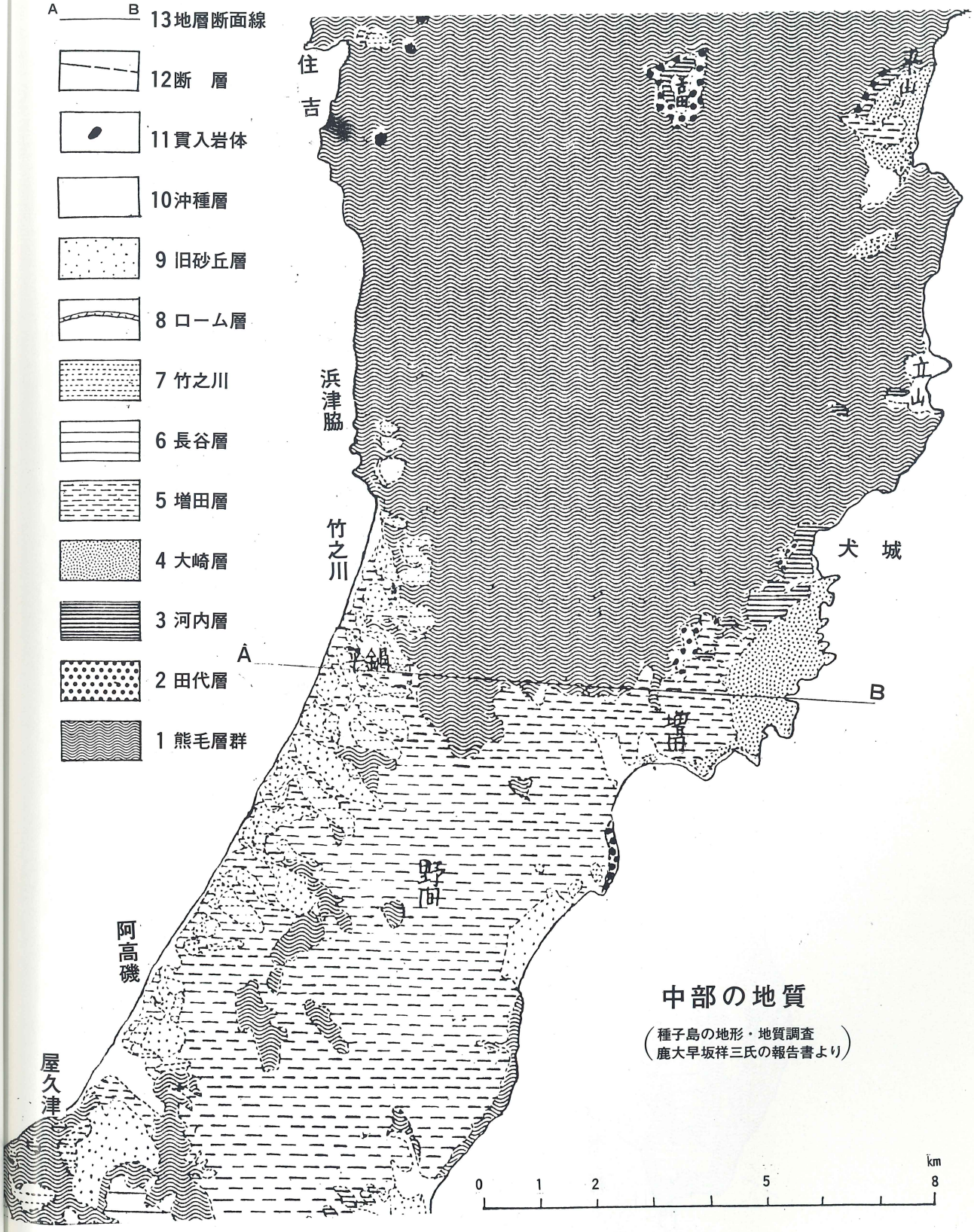
種子島の地質図
(Hayasaka et al.,1980による)



北部の地質

（種子島の地形・地質調査
鹿大・早坂祥三氏の報告書より）





中部の地質

（種子島の地形・地質調査
鹿大早坂祥三氏の報告書より）

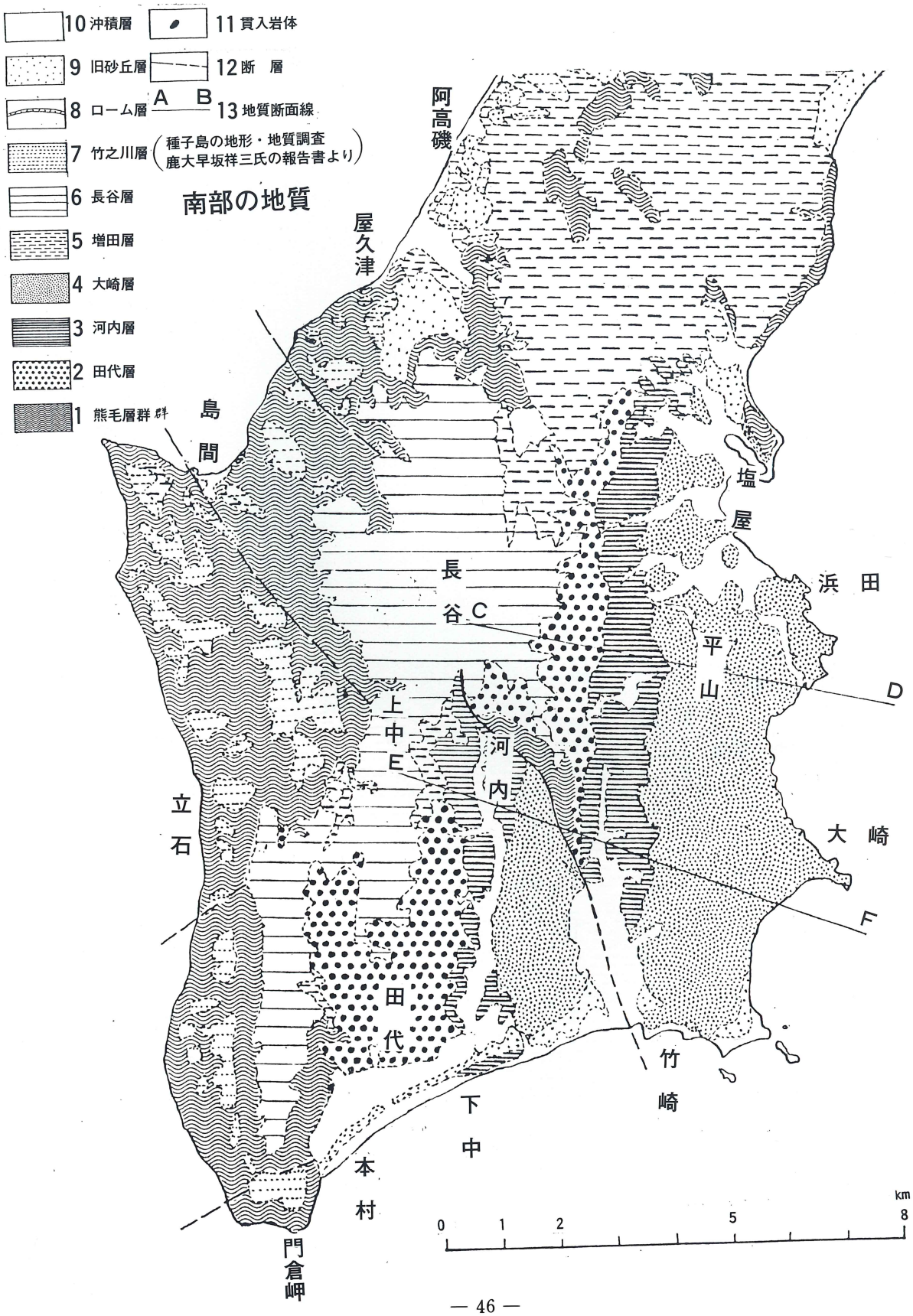
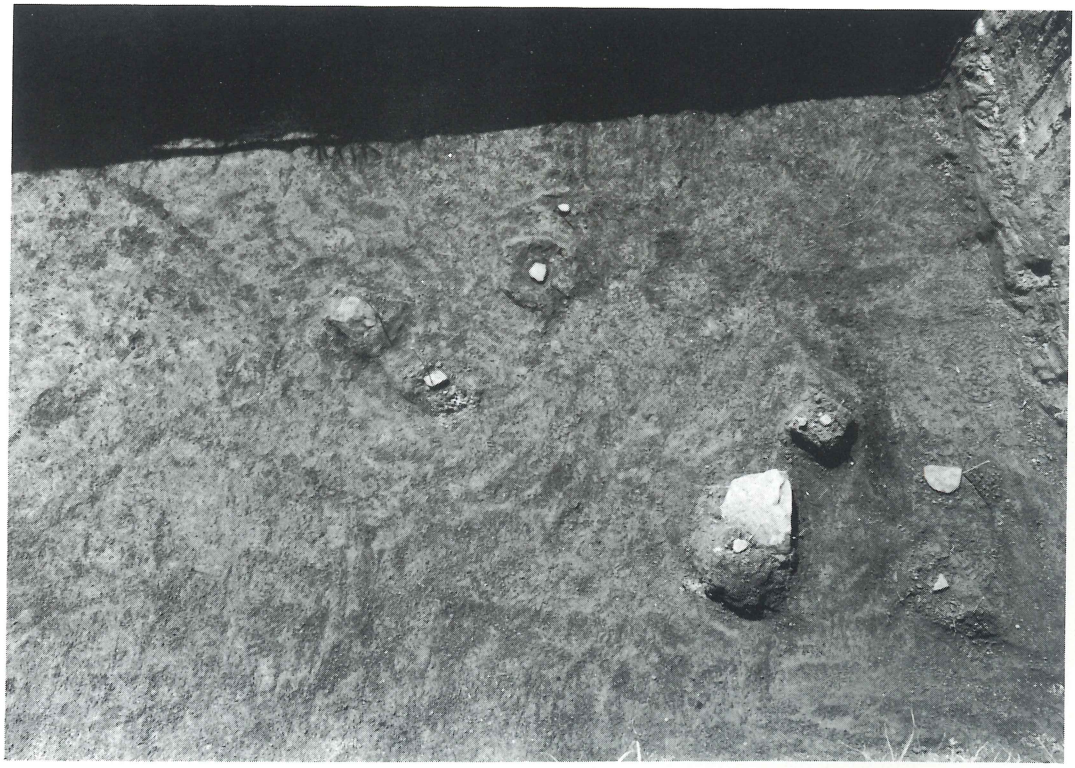

10 沖積層
11 貫入岩体
9 旧砂丘層
12 断　層
8 ローム層
A　B
13 地質断面線
7 竹之川層
(種子島の地形・地質調査
鹿大早坂祥三氏の報告書より)
6 長谷層
5 増田層
4 大崎層
3 河内層
2 田代層
1 熊毛層群
南部の地質
阿高磯
屋久津
島間
塩屋
浜田
長谷
C
平山
D
上中
E
河内
立石
大崎
F
田代
竹崎
下中
本村
門倉岬
0
1
2
5
8
km

図　　版

図版1

(上) 安納軍場地区遠景 (下) 安納地区発掘風景

図版2

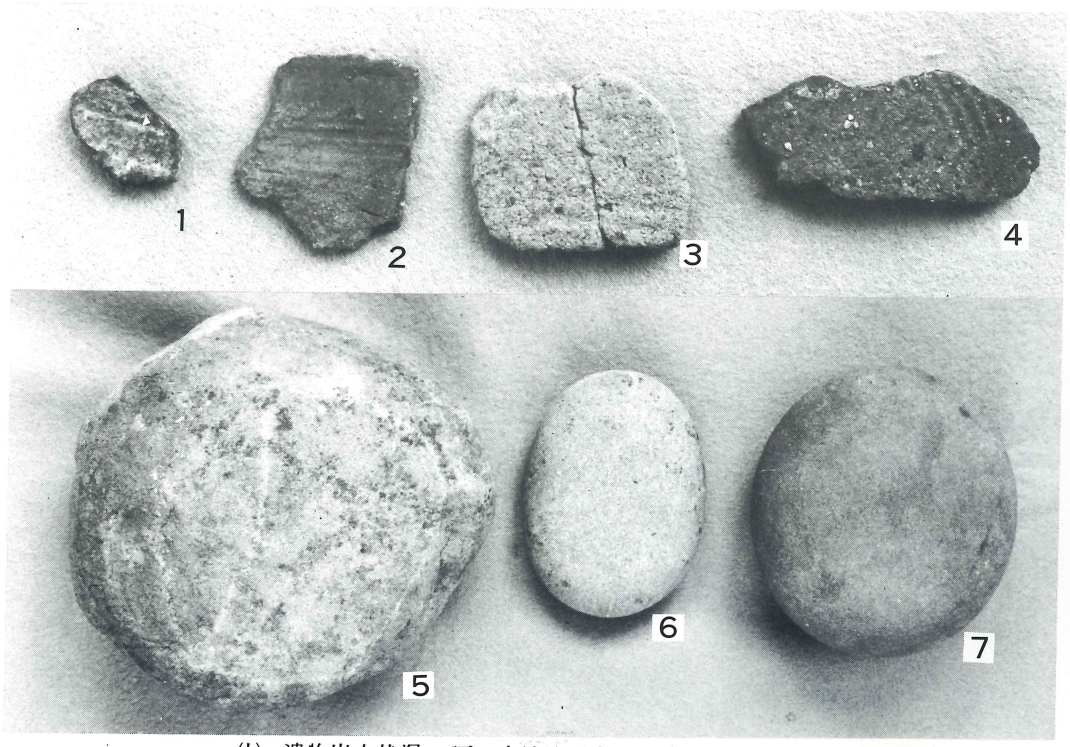


(上) 土層(第5トレンチ) (下) 遺物出土状況(第3トレンチ)

図版3

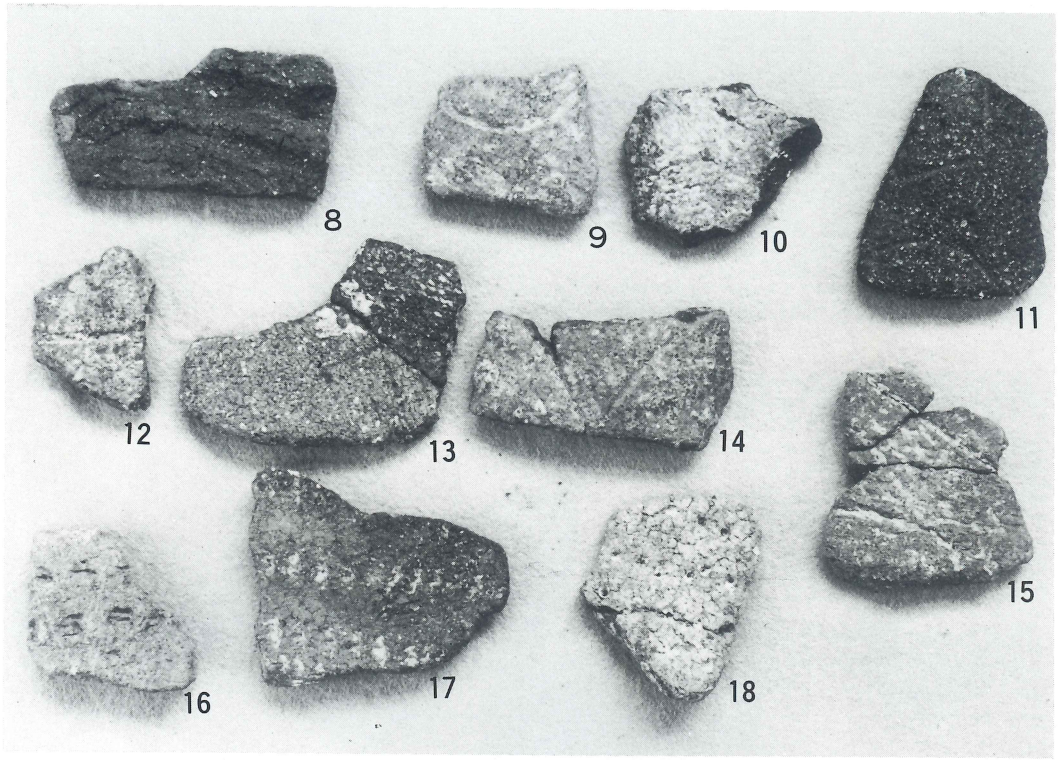
(上) 住吉地区高峯地区近景　(下) 土　層(第1トレンチ)

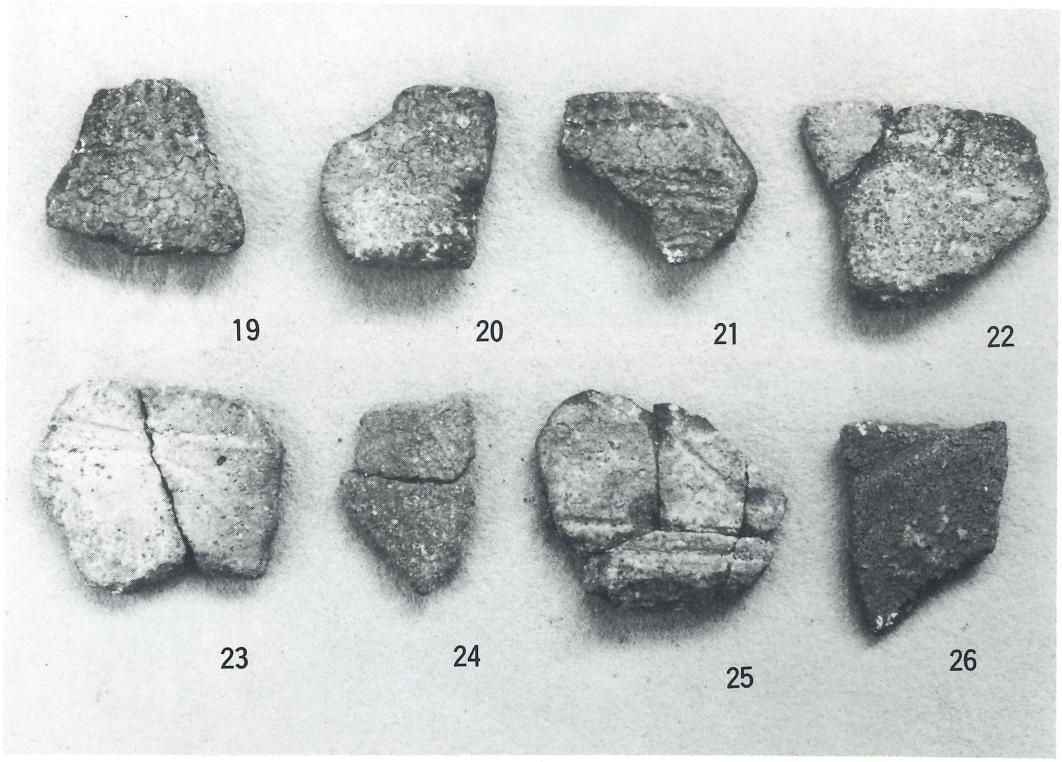
図版4



(上) 遺物出土状況　(下) 安納地区出土の遺物及表採資料

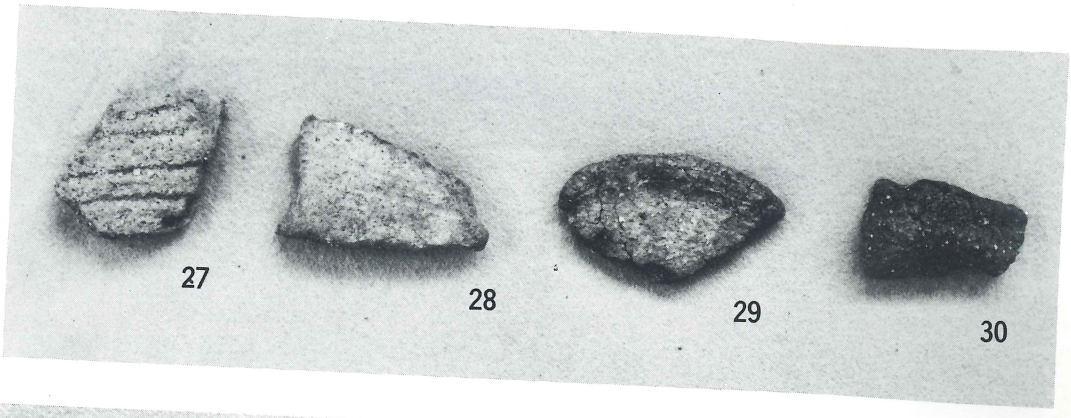
図版5

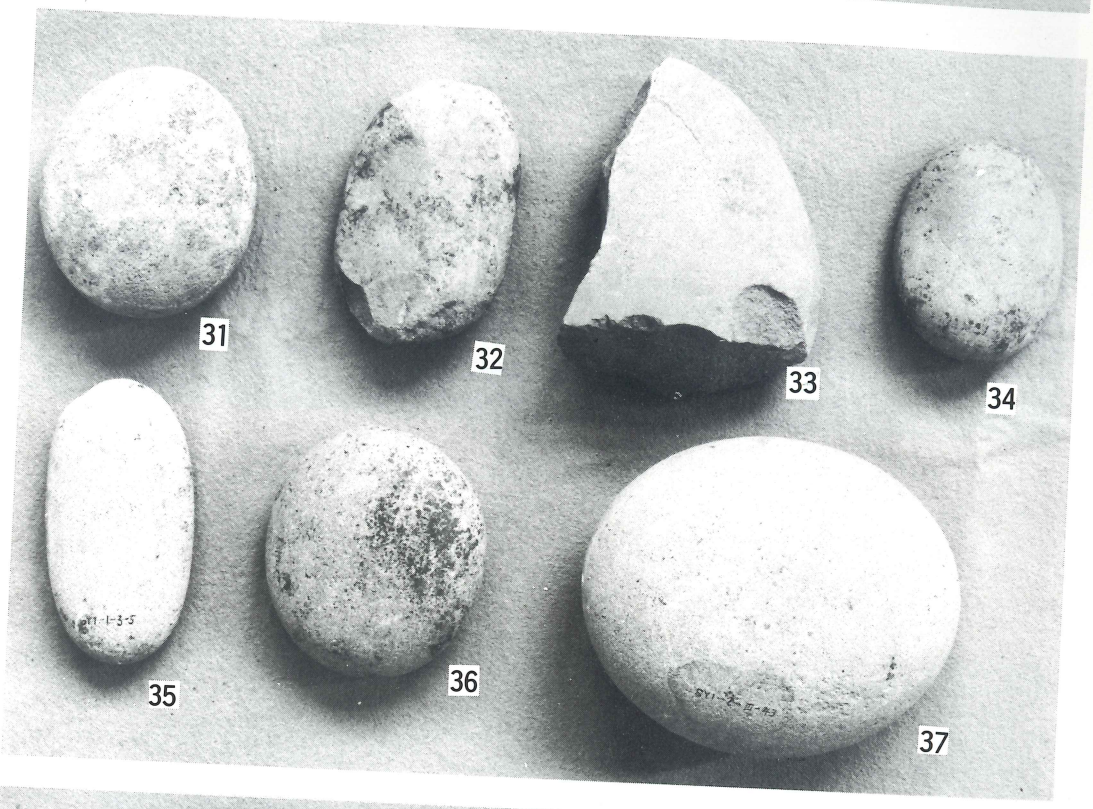


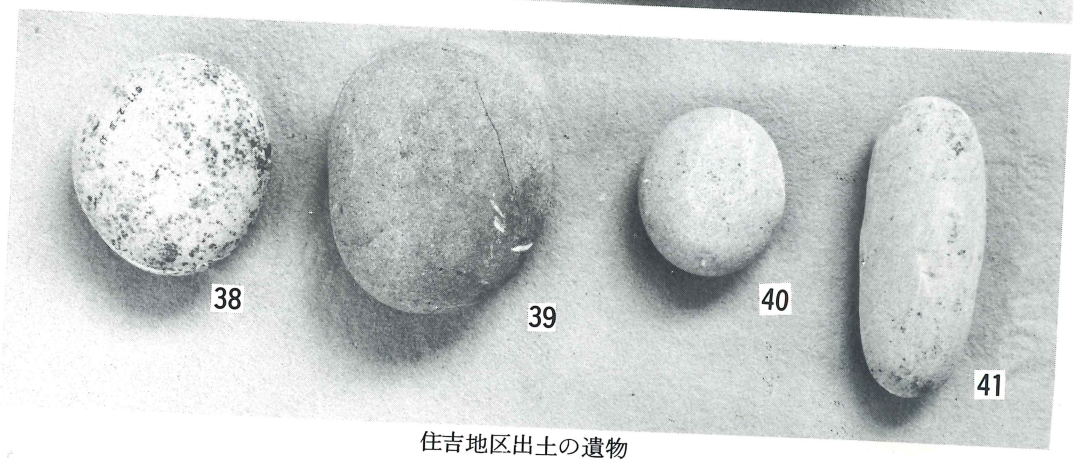


（上・下）　住吉地区出土の遺物

図版6

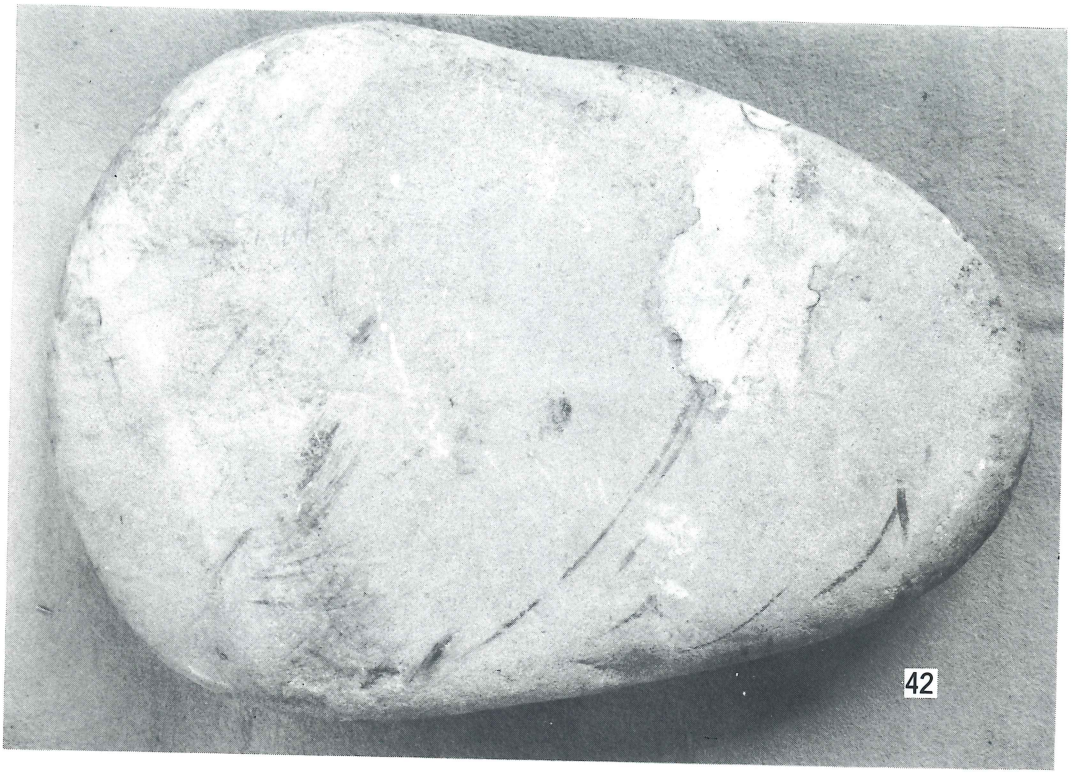




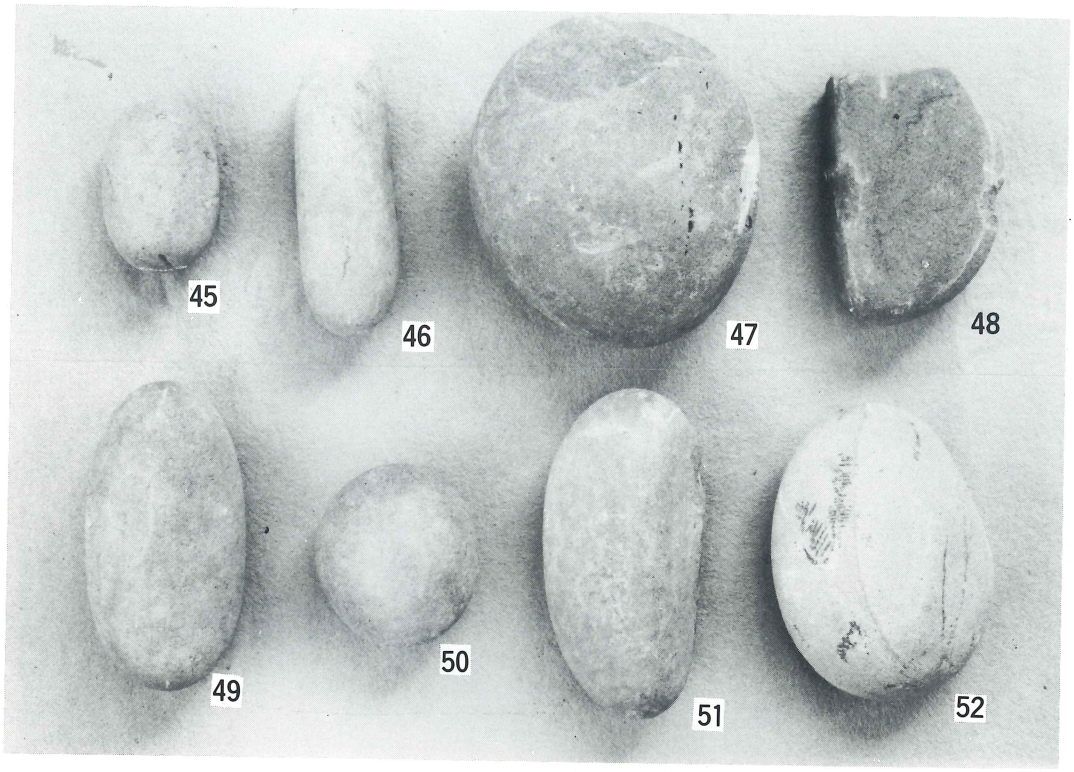


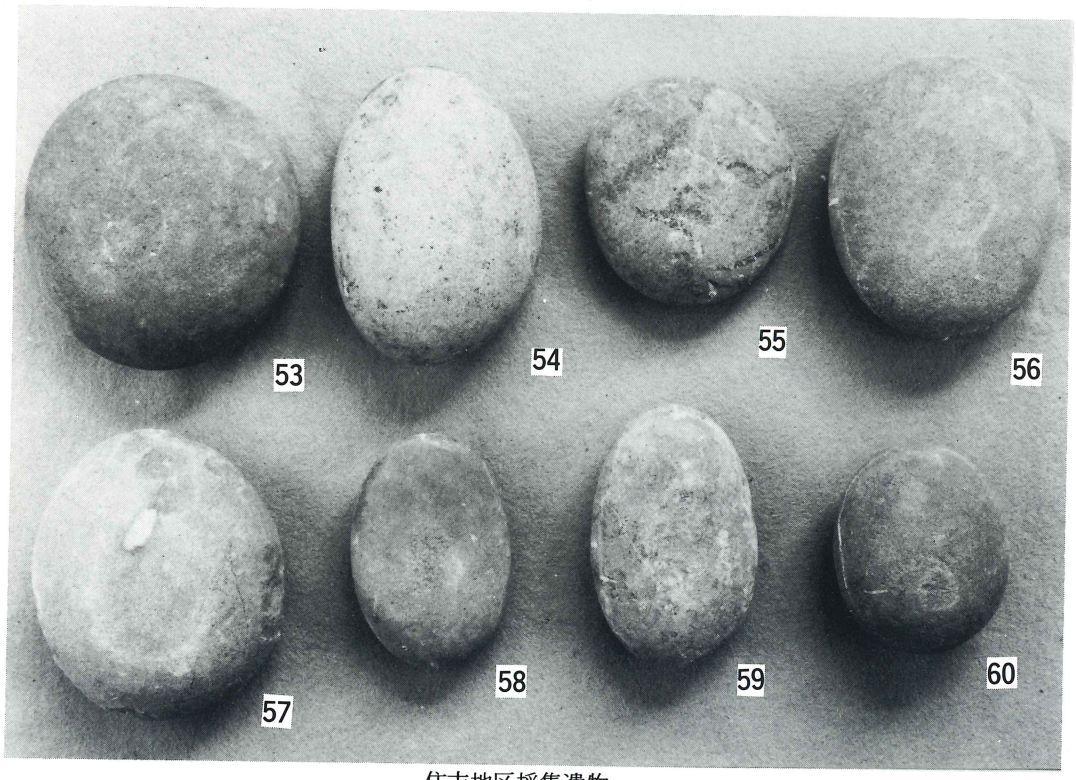
住吉地区出土の遺物

図版7

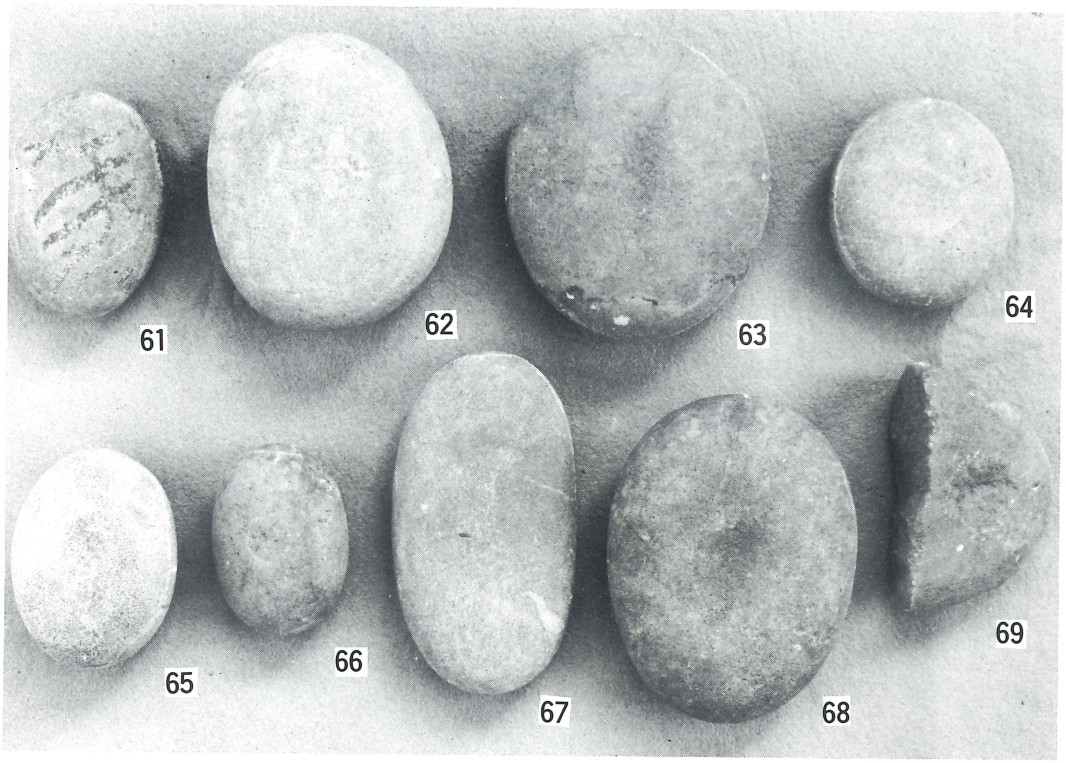


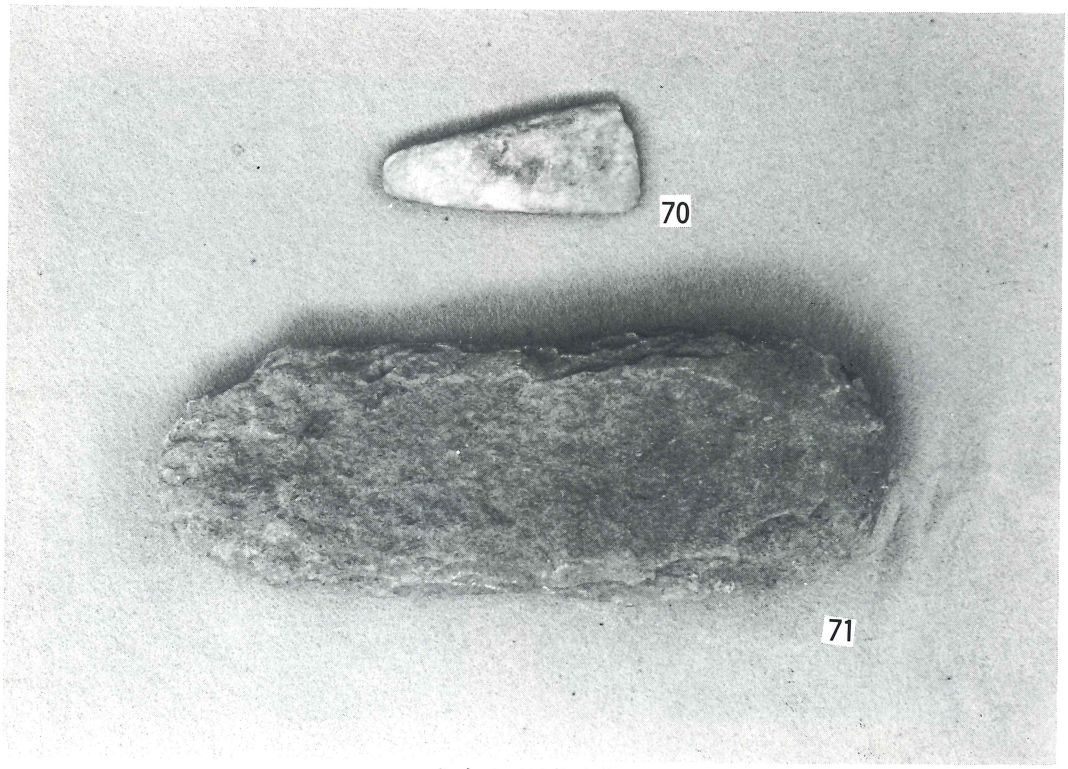
(上) 住吉地区出土の遺物及 (下) 表採資料





住吉地区採集遺物





住吉地区採集遺物

図版10

住吉地区採集遺物(上)　及び敲石の敲打痕各種図

図版11

敲石の敲打痕（各種）

あ　と　が　き

昭和59年度に確認調査を実施した西之表市安納・住吉地区の調査報告書を刊行することができた。本書を御利用いただく各位にあっては，取拾選択されて活用していただき，種子島における先史時代の研究がさらに進んでいけば幸いである。

最後に，調査から報告書の作成に至るまで，御指導・御助言をいただいた各先生方をはじめ，炎天下発掘調査に参加していただいた方々や出土品の整理作業に従事していただいた方々に深く感謝いたします。

発掘参加者：高石清秋・浦口みつえ・池畑ハツ・浦口イツ子・大河フミ・阿世知エミ子・月野ヒデ・木原和子・樋口フタミ・鮫島和子・川原幸江・武田ユミ子・山口順子・伊地知ヒロエ・赤崎フサ子・日高フジ子・鎌田ユイ・花木三枝子・遠藤保・深田行美・深田ツギ・能野リエ子・徳永ユミ子・上妻順子・長野一義

整理作業参加者：喜入カツエ・脇田美津江・岩坪千枝子・鎮寺節子・高瀬孝子・中川ミキ・宮岡雪子・川畑恵子・中原己美子・野口久子

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書

俣　江　遺　跡

高　峯　遺　跡

昭和60年3月

発行　鹿児島県西之表市教育委員会

〒891－31　鹿児島県西之表市西之表7,612

電話　09972－2－1111

印刷　㈲西之表新生社印刷

〒891－31　鹿児島県西之表市西之表16516

電話　09972－2－0476